

「中国と漢字伝来の時代」(2)

呉音と漢音の諸問題

先史古代研究会会員 矢吹寿年

“きび考” 11号（前号）掲載内容

1. 漢字の歴史的背景の概説
2. 日本列島には呉音が前 2～3 世紀に伝来
3. 仏教經典が文字普及の大役を果たす
4. 漢字伝来前後の年譜 (1)

4. 漢字伝来前後の年譜 (2)

248 年、この年卑弥呼の死後、男王が立つも國中治まらず「壺与」が立って治まる。魏志倭人伝、魏・呉・蜀の三国誌を書いたのは、晋の時代、著者陳壽が亡くなったのは 297 年の事である。この時、晋の役所内で呉音を用いたか、漢音だったか、はっきりと考証されていない。

265 年、この年、西晋の泰初元年、邪馬台の女王壺与（壺与・漢読み「いつよ」一説には、台與とも）使いを西晋南朝に派遣して入貢する。

340 年、この年百済王、太子を日本に送って人質とする。当時百済は呉音を使用。

366 年、この年百済との通交を約束する。

367 年、この時百済から初めて使いが来る。

391 年、この年倭国、朝鮮へ出兵して百済・新羅を攻め、臣（家来）とする。（広開土王碑文）

393 年、この年倭軍、新羅の王城を攻める。

404 年、この年倭軍、帯方に侵入し、高句麗軍と戦って敗退する。

418 年、この年東晋の安帝の時（358～418）倭国、東晋に使いし方物を進める。



421 年、この年倭王讃、宋に朝貢し武帝に安東將軍（あんどうそうぐん・漢読みあんどうしょうぐん）の称号を求める。

425 年この年、倭王の讃は宋に上表して方物を進める。

438 年、4 月倭王の彌（珍）、宋に物を贈り安東將軍の称号を求め、与えられる。仁徳天皇 16 年百済の博士、王仁が論語、千字文（せんじもん）をもたらすと記載。（古事記）この頃、百済は地理的に近い中国南部と親交があり、中国語は呉音を採用していた。（反論あり。東晋は漢音を使用した西晋が北方民族の南進、政治腐敗、天災などが原因で退去、南方に逃れて政権を維持した国であるから、南朝における共通語はおそらく、洛陽で使用された漢音を使用しただろうという意見あり）今だに統一した意見がない中国が日本に歴史を認めるようと云う根拠は何か。中国流の歴史解釈を採用させよと云う事か。

443 年、この年倭王の済、宋に物を贈り安東將軍の称号を与えられる。

451 年、この年倭王済、宋から使持節都督。倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓の六国諸軍事の称号を加えられる。

460 年、12 月、倭国王、宋に方物を進める。

462 年、3 月、倭国王。興、宋から安東将軍倭国王の称号を授けられる。

477 年、この年宋に遣わして方物を献じる。

478 年、この年、倭王。武（雄略か）、宋に上表文を送り高句麗を討つための援助をもとめる。武（雄略）、使持節都督。倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓の六国諸軍事鎮東大將軍に任じられる。（宋に組して高句麗侵攻を進言したのだろうか）

479 年、倭王武、齊の皇帝より使持節都督。倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓の六国諸軍事鎮東大將軍の号を授けられる。

502 年、この年、倭王武、梁の武帝より征討將軍の号を与えられる。

527 年、この年、近江毛野臣らの征新羅軍を阻み、筑紫国造磐井、反乱する。

528 年、この年、物部麿鹿火（ものべのあらかい）、磐井の乱を鎮める。

538 年、この年、百濟聖明王、仏像・経論を日本へ献じる。南朝から伝わった仏教は呉音で現在も読まれ、空海が将来した真言宗でも一部の経が漢音（理趣経・りしゅきょう）以外、呉音を用いる。

552 年、この年、仏教礼拝の可否について論争がある。

562 年、この年、任那の屯倉は新羅に滅ぼされる。

587 年、この年、蘇我馬子、聖徳太子らと共に、物部守屋を滅ぼす。崇佛派と廃仏派の確執が国政に及ぶのを精算した。

608 年、小野妹子を隋に派遣する。隋は漢音を用い、呉音を使用する遣隋使は侮蔑されている。公務に支障があるとして対応はしたであろう。

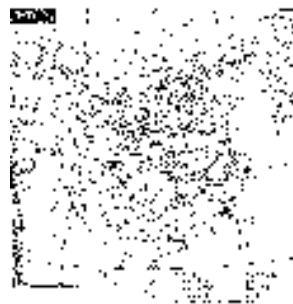
618 年、唐高祖李淵が皇帝を称して、国を唐と号す。古くから正音と呼ばれていた漢音を標準音とする。

620 年、この年、聖徳太子は大臣馬子と共に天皇記・国記・臣・連・伴造・百八十部ならびに公民などの本記を撰ぶ。

630 年、犬上御田鍬・薬師恵日らを唐に派遣す。（第1回遣唐使）漢音使用の必要性はこれ以前に知らされているはずであるが、最初のこととて、派遣団長の機転で、通訳を増やす等して対応、公務には支障を来たしたとは伝えていない。

646 年、大化改新の詔を出す。秦漢の富国策の条里制を採用し、戸籍・大道・宿駅の整備を行う。唐の律令を援・採用か。（根拠見当たらず）

662 年、3 月唐・新羅連合軍、高句麗を討つ。



663 年、日本の船帥、唐の船帥と白村江に戦って、大敗す。

664 年、唐の百済鎮将劉仁願、郭務悰を使いとして表函などを献じる。日本政府としては中国の大使として歓迎。土産を託して送り還す。

665 年、唐の使い劉徳行らを派遣して表函（ふみはこ）をたてまつった。

670 年、倭国、日本と改号す。（朝鮮の三国史記）

671 年、近江令を施行す。呉音。

701 年、大宝律令できる。呉音。

712 年、太安万侶らが古事記を撰上する。読み方に呉音を用いている。古事記の万葉仮名には呉音を用いる。

713 年、諸国に風土記の編纂を命じる。

720 年、日本書紀を舎人親王や、太安万侶らが勅により撰上。漢音による。持統朝、唐から続守言・薩弘恪を招き、音博士（こえのはかせ）に任じて、日本書紀の編纂に関与させる。以後日本国内の漢音の普及に勤める。

752 年、東大寺大仏の開眼供養がおこなわれる。世紀の万国博的行事であった。

793 年、公用漢字の呉音読みを改め漢音を漢字の正式の字音発令とする。

798 年、漢音を用いて呉音を廃する。僧侶などの抵抗があった。

804 年、第 12 回遣唐使派遣、僧空海・最澄らが随行する。

805 年、最澄、中国天台宗学の真髓を修めて帰国、天台宗を開く。天台山は呉音を使用した南の地方であった。

806 年、空海中国真言仏教の真髓を修めて五台山から帰国、五台山は北京近くの漢音使用の地方。この年、天台宗の開立が勅許となる。

816 年、空海、高野山を道場建立の地とすることを請願する。

819 年、空海、高野山に金剛峰寺を建立する。真言宗は漢音読みを採用するので時代に即応している。読経は呉言である。

894 年、菅原道真の建言により遣唐使の派遣を停める。

907 年、唐の滅亡。以後、独自の日本文化の興隆がはじまる。

以上簡単な伝来前後の年譜である。

5. 呉音から漢音へ

強いて我意を述べるまでもなく、古代においては漢字の読みは北朝の漢音でなくて、呉音が用いられ、南朝（**長江流域の米文化地帯からの伝来は、日本の縄文時代にあたり、弥生時代につながったとは云え、北の黄河文明より早い文化の成立を見、黄河文明となんら遜色の無い高度の文明をもって、後に中国を統治する黄河文明に影響を与えた。**）に日本（倭）は朝貢等の形で接触があり、彼の国の記録に残っている。特に仏教における看経においては、正確な発音として呉音を用いるのを常とし、普及したから、日本国中に漢字の読み方として敷衍（ふえん）したのであろう。

また、各所に建立された国分僧・尼寺は学

問所として、また、当時の文化の地方発信基地を兼ねていたから音楽や、算用、九九、賛嘆の歌や医学、薬学、生花、文字の手習いはもちろん、論語等の読修は、その後の道德・修身の基となり、以後の我が国の庶民の自主、自立の根拠地ともなっていた。

古事記に伝える伝来も、百済の国は、地域的に対岸に近いということもあって南朝と親しくしていたから、王仁（わに）も論語を呉音で暗証したに違いない。仏教は中国・朝鮮で行われていた国家仏教が日本に伝わり、為政者（天皇）の健康、幸運、長寿等を祈祷するものであったが、遣唐使の廃止、最澄・空海の入唐、最新の唐仏教の真髄である天台・真言の将来布教などから民衆のための仏教となっていた。伝来元の朝鮮・中国とは異なる仏教として発展してゆく。彼らが経を音読みし、それだけに止まっているのに対して、我が国では訓読みをして経の意味や書かれている事柄を把握しようとしたので、理解が深いのである。

当時の皇族や公家、高官たちが隋や唐を目が覚めたような感じで意識したのは、白村江の敗北の後、劉仁願がもたらした表函といわれる、譴責文であろう。

今、内容は伝わっていないようだが、その後の日本の対応を見ればおよそその見当は付こう。665年には唐の使者、劉徳行の一行も来日した。強大国、唐の自我が漢音読みを強制したようだ。

大国、唐との付き合い方を新羅にも意見を求め、また修好の仲立ちも頼んだであろう。唐の機嫌を毀さぬ外交に心を砕いたことであろう。それまで呉音、一辺倒であった国内の漢字読みは180度転換し漢音読みとなり、次の遣唐使派遣までに大急ぎで履修させたであろう。これらは皇室を中心に先ず徹底された。

百済には唐による戦勝記念の石碑を建てられ、大国唐と百済の力の差を宣布されている。大国唐はことあるごとに、これを持ち出して属国に甘んじるように強制したであろう。国内における漢音読みは古事記の呉音採用を反省して日本書紀の編纂を発議、漢音を使用し、官吏などの新しい教科書とする意図があったかもしれない。

6. 漢字発音の歴史の概説

漢字の読み音の歴史を簡単に履修しておく、前2〜3世紀から、魏・呉・蜀の三国時代、呉の国は建業（今の南京辺）を首都として江南一体を統治していた。この地方一体を「呉」と呼んでいた。その後の南北朝時代に入っても、南朝は晋・宋・斉といずれも建康（南京辺）を首都として漢文化を伝えていた。南朝は六代の王朝が交替して存続していたので、六朝（りくちょう）とも云う。しかし、現在における呉音の使用はほとんど見られないと云い、首都があった時代でも、官庁では以前と同じく漢音を用いていたであろうと推測されていた。しかし唐ほど強制されていなかったのは、この地域は、ある時期呉音が標準音として使用されていたからだろう。中華人民共和国が後に北京語を標準語として建国、教育を広げて、現在では老人の一部しか呉音を伝えていないと云うことではないか。

日本に最初に漢字を伝えたのは韓半島の南西部、百済は黄海に面して長江の下流域と交易を盛んに行っており、百済の漢字読みは呉音であった。呉音は朝鮮半島と対馬をむすび対馬を経由して日本に伝わったために対馬音とも呼ばれる。北朝の官吏ほど厳しくなくて、わざわざ矯正をすることもなかったかも知れない。話し言葉も一般人は呉音を使用する者も多かっただろう。

しかし各時代を通して中国の戦乱に飽きた民衆や、敗戦の将兵がボートピープルとなって日本に渡来したり、徐福の渡来も各地に伝説とは

言い難い足跡も残る。大和の巻向で発掘された、卑弥呼の宮殿と云われる遺跡の竪穴列等に非常に洗練された建築技術、当然建築設計図があっただろうが、この技術をどこに求めるか。徐福が将来したとしか考えられないではないか。弥生時代のこの時期、他にこれら建築文化伝来を伝えてないからだ。

倭寇を単なる海賊にとらえず、自由海民として交易を兼ねていたとすれば、彼らも呉音言葉に通じていたであろう。彼らは台湾や東南アジアにまで至っていた。遣唐使の廃止により、少し規制が緩んだが、以降、律令の読みや政府関係の種類の読みは漢音を用い、仏教においても漢音を学ばない僧侶には中国への渡航が許されなかった。その後、唐音宋音が伝わり、平安時代末期平清盛の日宋貿易鎌倉時代栄西や道元による臨済宗や曹洞宗、禅宗の導入、これら僧たちを運んだのは中国商人の大船であった。この関係者はその都度大陸の言葉をもたらし、当世風の文化として、庶民に至るまで受け入れられている。

7. 考古学者の苦悩 漢音読みと呉音読み

中国国書に記載された地名表示から、これらを解き明かそうとして、苦悩しているのは漢字、漢文に縁がなかった考古学者たちであって、目新しいものだから一喜一憂しても、進歩がなかったように思う。(考古学者には理解できないのだ)

漢音で読むのと呉音で読むのとで、どのような問題提起があるか、というと、古田史学では「倭奴国」(わのなこく)は漢音では「い、ゐ」奴も呉音の「ナ」ではなく漢音の「ど」としか読めない。とすると「倭奴国」は「いど国」すなわち「伊都国」であり、日本最大の前漢鏡出土地域である福岡県前原市一帯とぴったり一致する。金印ももちろん「伊都(倭奴)国の王」が貰ったものである。倭を「倭

と読むのは八世紀、列島の支配権を奪った大和政権が自らをそう呼んでいたからであろう。中国の漢音地帯で倭を「わ」と読む読み方が登場するのは、大和(だいわ)政権の使節団が唐を訪れ、自らの主張である一元史観を、強引に認めさせようとした西暦1039年成立の「集韻」からである。「大和」は本来「ダイワ」であって「やまと」とは読めない漢字である。読まされているのである。(読んでもらいたいのだ)

「ヤマトは本来二つの「奴(土)の国」すなわち「戸(門)の国」すなわち、「ヤマ国への入り口の国」、邪馬壹国」とそれを引き継いだ九州政権を指す言葉であったろう(古田史学会)

漢字は当て字で音により使用しており、昔の説の倭奴の身分制度の奴婢を指したものでは勿論ない。とすると、魏志倭人伝を始め、中国二十四史における地名・人名は総べて漢音・呉音の両読みを併記して考えないと過ちを犯すことになりかねない。今までの解説書の読み方は反省すべきである。

中国を脅かした「匈奴」がある。一般には「きょうど」と読んできた。これらは「漢音」である。では「呉音」ではどうか。現在の辞書では記入がないものもあるが、「くぬ」と読む。「ハンヌ」とルビを打つものもある。4世紀末から蒙古地方を根拠地にして中国を脅かしたトルコ系の遊牧騎馬民族で、漢代に分裂を起し、南匈奴は5・6世紀頃漢民族に同化した。

北匈奴は、2世紀中頃キルギス地方に移動し消息を絶つが、4世紀にヨーロッパを荒らしたフン族が北匈奴の子孫であるという説がある。

朝鮮においては、陸地続きであり、韓国人は肯定しないが、中国の代々の王朝に、属国として従っていたことを指摘されており、王朝が変わる度に使用する漢字読みを変えてい

たことが伝わっており、民衆が漢字になじまなかった一因でもある。

途中でハングルの導入、漢字交じり文の採用等、苦勞するが、日清戦争の終結を経て、韓国の独立、日韓併合まで具体的良策はなく、その後、日本の国民皆教育の恩恵を受け、以来、文盲は減少した。韓国では仏教経文を呉音で読むところと漢音で読む寺がある。現在では呉音が使用可能な国は日本だけではないか。

おわりに

白川静博士の漢字起源の研究も、中国の学者は黙して語らず。誠に社会主義の哲学（スピリッツ）では古代中国文化は解明できないと云う事か。小学校において、論語を道徳の基本根拠資料として授業が出来ることが必要だと私は思う。それは日本文化に浸透した論語精神継続と云う歴史的な大儀名分がある。中国で使わないからと言って論語を切り捨てるのはどうかと思う。勿論、忠孝も現代的な解釈で良いではないか。

卑弥呼 公孫子の不正を告発

魏志倭人伝を読み解く

会員 矢吹壽年

魏志倭人伝の卑弥呼の朝貢を景初二年(238)6月とし、太夫の難升米を遣わして郡(楽浪・帯方)に詣で、天子に朝献せん事を求むと見える。

楽浪・帯方の太守は公孫子(先祖が公の家柄の豪族)で、専横の事が多く、魏国王も問題視していた。周辺国からの朝貢を横取りしていたと思われる。魏はこれを八月以前に討滅したが、卑弥

呼の女性特有の不正を許せない感性が、これを告発したのではないかと提案したい。

倭国からの朝貢は、男生口4人、女生口6人と班布二匹二丈とある。これを帯方太守劉夏が取り次いでその年12月、卑弥呼を親魏倭王と為し、金印紫綬を仮す。装封して帯方太守に付し、汝に仮授せん。(太守の使いが訪日し、親授する)……(中略)……難升米・牛利遠きを渉り道路勤勞す。

いま、難升米を以て、率善中郎将(将官)と為し、牛利を率善校尉(尉官)と為し、銀院青綬を仮し、引見して勞賜して遣わし還す。東夷の使者を魏王が引見し、言葉を賜っているのである。これがどのような重要なことであつたか、日本の学者が解かっていなかったと云える。当時の魏の官位を与えられることが、どれだけ重要な意味を持ったか理解できないでいる。

他に与えられた絳地校龍錦(赤地に雌雄の龍紋の錦)五匹、絳地縹栗の罽(赤地に絞り染めの毛織物)十張、蒨絳(せんこう＝鮮やかな赤の布地)五十匹、紺青(鮮やかな青色の布)五十匹を以て汝の献ぜし貢直に答えん。また、特に紺地句紋(こんじこうもん)の錦三匹、細班華の罽(さいはんかのけい)五張、白絹五十匹、金八両、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠鉛丹(しんじゅえんたん＝パール又は水銀朱、鉛丹は女性の化粧料とする)各50斤を賜うとある。

参考文献＝『歴史読本 2011.4月号特集ここまでわかった邪馬台国』

高島神社（笠岡）の石碑

解説の顛末

テーマ提起者 会員 藪田徳蔵
碑文読下し者 会員 矢吹壽年
現代語訳と編者 会員 山崎泰二

1. 石碑解説の経緯

当会の藪田徳蔵会員から、地元の高島神社（笠岡市高島王泊）の石碑が、住民レベルで判読でき兼ねて思案しているので現代語訳が欲しいと、何枚かのカラー写真を届けていただいた。

明治初期の石碑と伺っていたので、仲間の矢吹壽年氏に相談すると、漢文混じりの候文かと思しいしや、万葉仮名の草書体文字で、相当の教養人の撰文と判る。幕末には1000語近い万葉仮名が使われていたようなので、容易なことではない。判読は専ら矢吹氏にまかせ私は周辺資料の調査と現代語訳を担当する。



藪田氏提供の石碑



冒頭の書き出し文

2. 万葉仮名文体

矢吹壽年氏読下文

注 ○数字は改行を、以下は解説の読み下し文

- ① <よろつ慕^{した}わしきは、いにしへに、しくものあらじ、いにしへありてこそ、したがいて。いまとあらしめ、>
- ② <然らさりせば、本なきに、末あらめや、そゝろなく、ものこゝろかゝりけり、ま

して、天津^{えにし}ひつぎに縁^{なお}あらむそは等>

- ③ <閑^{ざり}やむべきひとやはある。吉備のみちなかなる、高島もすなはち其のひとつに

かむやまといわれびこそめらみこと
て、神日本磐余彦天皇の>

- ④ <西よりおこりたまふときに、宇佐^{う さ おか え}岡挨のみやなどへて、移りいでませる地なり、神島といへるは、そのきたのかた>

- ⑤ <十町ばかりにありとしは、ひとつしまなりしを^{うしお}あらき潮のほりてかく、片かたになりてるとなむ、わけて昔の>

- ⑥ <なごりとみたるは、一もとの神木なりけり。天^{すめらみこと} 皇^{おん て}の御手づから植えたまひしといひつたえて、枝さし たかくしげり>

- ⑦ <たてりて、ながるゝいづみの水もたゝにやはおぼゆる げな、ひのさやかなるのみ、かつてところの状けしきさへ世「=無」づかず、か>

- ⑧ <うかうしきにふるめかしき瓶^{かめ}やうのものなどときどき ほりいださるゝは、かけてもいまめく器にもあらじ。此の天>

- ⑨ <皇をいつきまつれる地なり。王泊^{おうどまり}といふなる。はなはなしき祠^{ほこら}ならねど、そのかみ^{みとせ}三年ほどましまして、船をそろ>

- ⑩ <へ、糧^{かて}をそなへて、天のしたを平^{たいらげ}む

- と、せさせたまひしことまで、面かけにこそうかびしが、果し)
- ⑪ て大和の国、ところところを経つつあまたたび^{いくさ}軍して、てまつろはぬひとをまつろへたまひ、よろつ代のためし)
- ⑫ <なき^{いさお}功なりぬれば、うへもその、はつ国しらしし年をこそ、紀元にはたてられにけれ。さすがに中今は、本を>
- ⑬ <わすれず、昔にのつとらせたまふぞ、ことわりにかなひて、いふよしなきをかく、ひさしくうづもれし宮跡さへうつゝ>
- ⑭ <に あらはれぬるは、少縁のことにてありなむや、いはまくもかしこけれど、
^{すめらみこと} 天^{みたま} 皇の御霊のしるべなりかしなは>
- ⑮ じめこれをみいだせるは、高木禎吾といふ人なりしが 松田謙三等とあつまりて、ありつるやうを杉宮内>
- ⑯ <大輔^{つけ}に告のべ、公へのまをしふみは、高崎岡山県令につげてたてまつれり。をどとしの春にいたりて、宮>
- ⑰ <内省より、金そこばくあてたまひ、かの、神木のわたりをば、おおやけ地とさだめられけるを、おなじく^{ほこら}当祠をも>
- ⑱ <あらたにしつらはるなりと氏子どもねがひければ、ねがいひのま々にゆるされぬ。河田三七とかやいふが、ところたてま>

- ⑲ <つりて宮つくり^{のち}にいたりけるは、道ある御代につきつぎしきわざかな。かかる人々の名をしるすことなかり>
- ⑳ <せば、ながくつたふるによしなからまじ。
後のいにしへをしのばんものは、幸いにこの石ふみによりておもひさと>
- 21 <りなまし。>

注記

^{てんがく} 篆額＝「**碑石社神島高**」一行一字 縦書

篆額の右 「神武天皇行宮趾」と縦書
(宮内大輔) 杉 孫七郎謹書と左端に縦書

明治十七年一月

大教正 田中頼庸 謹撰
植松有経 謹書

3. 現代語訳

山崎泰二

〈総べての尊きことや慕わしきことは、先人の歴史があつてこそ、今の我々がある。〉

〈大きな木も、基(もと)になる幹が無ければ枝葉は存在しない。何かの所縁(ゆかり＝いいつたえ)に心引かれ強い古(いにしえ)を感じるのは確かな歴史があるからだ。〉

〈まして、日本の皇室にご縁がある事柄は疎かに出来ない。この岡山の地に残る高島(笠岡市高島)もその重要な一つであります。〉
〈神武天皇が九州の宇佐(大分)から岡(おか＝筑紫)や埃(え)の宮(安芸)を経て吉備の高島にお立ち寄りになった大切な土地であります。〉

〈神島(こうのしま)もその北方十町(約1

k m) ばかり離れているが、元は一つの島であつたが、荒い潮流で堀り別けられ別々の島になった。〉〈が、そこに天皇（すめらみこと）のお手植えの神木が、地元で大切に守られてきた。〉〈その枝ぶりも高く繁り、流れる真名井の水も豊で、それ以外にも古代の土器なども出土していて、古（いにしえ）の栄えが偲ばれる。〉

〈この高島には天皇が留まった王泊（おうどまり）との地名があり、（日本書紀では）3年ほど滞在され、その間に軍備や兵糧を貯えて、この国を平定しようと準備をなされた地であり、その面影を残している。〉

〈この地を出発され大和の国に至り、各地を転戦され、反抗する輩（やから）を平定し、その地を始めて治められたので、〉〈紀元と定められた。しかしあれから時を経て、忘れがちだが、それでもこの高島は今の世にまで受け継がれてきた。〉〈これも神武天皇の御霊（みたま）のお導きであろうか。〉

〈この事実を最初に発見したのは、（地元在住の医者で学者の）高木禎吾と言われる人であつたが、松田謙三（1832～1891 明治11年から17年岡山に滞在）らと相談して、高崎五六岡山県令（1836～1896 明治8～17年在職）を通して、杉宮内大輔（宮内庁の役人）に報告した。〉〈一昨年（おとし明治15年）の春になって宮内省から若干（そくばく）の予算がついた。〉

〈主としてこの神木の周辺を公的な地とし、同時に高島神社の社も新築して欲しいとの氏子の要望も許可になり、河田三七なる人も土地を寄進して、神社建築に至ったことは、王道の正しい御代に相応しく素晴らしいことであつた。〉

〈このように努力された関係者の名を伝えて顕彰碑を残し、後の世に古（いにしえ）を偲ばせ、永く伝えることは大切で、この碑文に拠って思いを馳せて戴きたい。〉

篆額＝「高島神社石碑」1字1行縦書き

（宮内大輔）杉 孫七郎 謹書

明治17年1月

大教正 田中頼庸 謹撰

植松有経 謹書

注

杉 孫七郎（1835～1920 子爵）

田中頼庸 明治期の神道家伊勢神宮大宮司ほか

植松有経 幕末・明治期の歌人

4. 万葉仮名文体

世良長造氏氏読下文

よろづ慕はしきは、いにしへに、しくものはあらず、いにしへありてこそ、したかひて、いまもあるらめ。

然らさりせは、本なきに、末あらめや、こころなきものすら、かかりけり。天津ひつきに、縁あらんには、等閑に、やむべきひとやはある。

吉備みちなかなる、高島も、すなはち、其ひとつにて、神日本磐余彦天皇の西より、おこりたまふときに、宇佐・崗・埃・の宮などへて、移りいでませる地なり。

神島といへるは、そのきたのかた、十町ばかりにあり。もとは、ひとつしま、なりしを、あらき潮の、ほりて、かく片かた、なりけるとなむ。

わきて、むかしのなこり、と見ゆるは、一もとの神木なりけり。

天皇の御手づから、植たまひし、と、いひつたえて枝さし、おかしくしげりたてり。

なかるるいづみの水も、たたににやは、おほゆる。昔なひの、さやかなるのみかは、ところの状けしきさへ、そつかすかうかうしさを、ふるめかしき瓶やうのものなど、

ほりいたさるるは、かくても、いまめく器にはあらじな。

天皇を、いつきまつれる地や、王泊といふなる。ねむねしき祠ならねど、そのかみ三年ほどましまして、船をそろへ糧を整へて、天の下を平げんとは、なしたまひし事まで、面かげにこそうかびしか果たして大和の国、ところところを、経つつ、あまたたび軍して、まつろはぬひとらを、まつろへたまひ、よろづ代に、ためしなき功なりぬれば、うえも、そのはつ国しらして、年をこそ紀元にはてられにけれ。

さすがに申す、今は本をわすれず昔のりとりせたまふぞ。ことわりに、かなひて、いふよしなきを、かくひさしくうづもれし宮跡さへ、うつつに、あらはれぬるあり、縁のことにありなんや、いはまくも、かしこけれど、天皇の御霊のしるべなりかしな。

はじめ、これを見いだせるは、高木禎吾といふ人なりしが、松田謙三等もあづかりて、ありつるやうを、杉宮内大輔に告げ、公への、もふしふみは、高崎岡山縣令に、つきてたてまつれり。

をとどしの春にいたりて、宮内省より、金そくばく、あてたまひ、かの神木のわたりを、おはや地と、さだめられたるを、おなじくは、祠をも、あらたに、しつらはまほしくと、氏子ども、ねがひければ、ねがいのままに、ゆるされぬ。

河田三七とかや、いふが、ところは、たてまつりて、宮つくりにかゝりけるは、道ある御代に、うつくしき、わざかな。

かかる人、この名も、しるすことなかりせば、ながくつたふるに、よしなからまし。後のいにしへを、しのばんものは、幸にこの石ふみに、よりておもひさとりをまし。

出典 『吉備高島宮趾』世良長造著（郷土史家）

吉備高島宮趾顕彰会 昭和 11 年 11 月 10 日

書写コメント

この著書は平成 24 年に先史古代研究会の仲間で笠岡の高島を探訪した際に、井上秀男会員から借用しコピーしていたものを、今回の藪田氏の依頼で調査している過程で、偶然手に取るようになった。

解説中に藪田氏から同じものを追加資料といいただく。吹壽年氏の解説と合わせて記録に残す。

5. 現代語訳＝読下し作業を終えて

平成24年笠岡高島が神武天皇謂れの知探訪会を開催し、現地会員の徳田・河田会員には大変お世話になった。その後もお二人は現地の遺跡を顕彰整備維持に、ご高齢にも拘らずご夫妻で頑張っておいでです。今回徳田先輩からの依頼に、矢吹壽年氏が果敢に挑戦頂き一定の解説が出来て、地元の皆さんにも喜んでいただいた。

また、今年の2月11日建国記念日に、先史古代研究会では、児島(三幡)の高島探訪を試みたが、20名を超える仲間が、現地の「高島を考える会」の井上敏志さんたちの歓迎を受けて、渡船上陸した。“きび考”には丸谷会長が世良氏の著作を参考にした論文を寄稿して頂いている。編者冥利に尽きる。これも神武天皇の引き寄せる因縁を感じた。



藪田氏の蒐集資料の表紙と井上秀男氏の蔵書資料

いざわのみや ・伊勢遥宮の伊雑宮を拝す

会員 濱手英之

平成27年6月、来年のサミットが伊勢志摩にて開催されることが決まった。伊勢志摩と言えば伊勢神宮。天照大御神も座します日本を代表するパワースポットでもあると思う。伊勢神宮には5～6回参拝しているが何度行っても清められた気がする。伊勢うどんも美味しい。何より、妻と初めて一緒に出掛けたのは伊勢神宮日帰り参拝だった。私にとって思い出深い場所である。

さて、ネットの発達した社会では今まで以上にいろいろな情報が入ってくる。検索エンジンの最適化等で、さらに個人の趣味や認識に応じた情報が出てくるようますます専門的な情報も目にする機会が多くなる。そのなかで、「伊雑宮」(いざわのみや、いぞうぐう)の事を知った。



今回参拝した伊雑宮（志摩国一の宮）

伊雑宮は式内社で、志摩の国一宮である。皇大神宮の別宮であり、天照大神の遙宮とも呼ばれるらしい。御祭神は「天照坐皇大御神御魂」(あまてらしまずめおおみかみのみたま)である。日本3大御田植祭も行われ、御田植祭では7匹の龍が矢の湾から大御田まで上がってくるという伝承もあるらしい・・・瀬織津姫との関係をいわれることもあるそうで、今度伊勢に行く機会があったら絶対に参拝しようと心に決めていた。

チャンスは突然やってきた。長野市にて、業界の集まりがあり、大いに学んできたのだが、帰りは

一日余裕がありそうだった。ゆっくり、温泉でも浸かって帰ろうかとも思ったが、長野から、少し遠回りすると、伊勢に寄れないこともないというひらめいた。ちょっと遠い気もするが何とかできるだろうと車を走らせた。



車窓からの木曽路



御岳山の雄姿

時間があると思い一般道に行くことにする。同じ道ではつまらないので、長野県伊那市からトンネルを西に抜け、木曽路にと入る。雪道用の道路は広くて走りやすい。木曽路の景色を満喫しながら走る。途中、日に照らされた御岳山を眺める。去年は突然の噴火で大変なことになったが、なんとも美しくたたずんでいた。古くから霊場であり、死火山とされていた御岳山が噴火したことは、なんだか日本中が心を引き締めると言われている気がする。

伊勢までは200kmほどもある。下道を来たことをちょっと後悔する。が儉約の為、近くまで行って、車中泊をしようと決めた。

途中で温泉にでも入ろうと探すがなかなか見つからない。結局、伊勢の手前で大きく、きれいなお風呂を発見。ゆっくり温まりくつろぐ。



出来るだけ近くに車中泊しようと、志摩市まで行く。ナビで道の駅に行くと、深夜12時頃だった。50台

位入れそうな駐車場に、車中泊の先客が3台。ハイエースの荷室を片づけて、シェラブに入る。疲れの為かすぐに眠りにつく。朝方目が覚める。寒い、寒い、寒い！！外は強風が吹き荒れている。しょうがなくエンジンをかけて休む。早めに起きると、素晴らしい朝焼けが見えた。早起きは3文どこ

ろの得ではない。思わず手を合わせる。

7時過ぎに伊雑宮にお参りする。伊勢神宮に一年遅れて式年遷宮をするそうで、まっさらな宮にお参りできた。



遷宮直後のまっさらな伊雑宮

三大御田植祭のある神田も広い。料田(神田)にいと、太鼓音が聞こえてきた。突然の強い突風が吹き荒れそして静まる。神事が始まるようだ。



伊雑宮の料田(神田)



伊勢神宮の神官も居られる

お参りするときプレスの人が数人いるのが気になったのだが、近くまで行ってみる。皇宮警察？の方がおられるので聞いてみると、結構近くで見ても良いと有難いお返事をいただく。後で聞くと、当日は祈年祭であつたらしい。伊勢神宮と少しずらして行うとのこと。神職さんたちも伊勢から来られるらしい。なんとも良い日、良い時間にお参りできたものだと感謝する。

一般の方は数人だった・・・神事が終わるともう一度突風が吹き荒れ鳥たちが騒いだ。近くだったが祝詞はよくは聞こえなかった。しかし拍手(かしわで)は聞こえた。これはありがたいことである。一般に神社では、2拝2拍手1礼にてお参りする。伊勢の場合、八度拝み 起拝と座拝を四回行った状態で、八回拍手を打ち、これを二階繰り返す。目の前で見えた。



神前の祭壇



一連の祭礼儀式が進行する

ずっと気になっていたのである。なんとも幸運でうれしい。八拍手の打ち方も、1, 3, 4, 1と間をおいて打つ。最後の一拍手は余韻である。なんだか神妙な気持ちになった。

出雲大社では、四拍手である。これは、黄泉の(四音)の国だからか、それともお伊勢様に遠慮しているのか、考えると眠れなくなりそうである。帰りは伊勢神宮の内宮と外宮そして、飛鳥の橿原神宮にもお参りして無事に家に着いた。

走っている時間が多かったが、気分はすこぶるよい日となった。生かしていただいてありがとうございます。

訪れた文英様石仏と板碑

会員 井上秀男

1. 文英様石仏との出会い

今から30年前にもなる。倉敷市広江地区で福田史談会という郷土史研究会があって、この会の会員として活動していた頃である。同会の会員の女性の方で片山淑子さんから一冊の本を戴いた。

その本は『石ぼとけ』と表紙に書かれたモノクロの石の写真集で「文英様石仏」という石仏であった。今まで石仏といったら、野辺の道のほとりに立っている舟形に成形された光背の中に右手に錫杖、左手に宝珠を持って蓮弁の上に立つ延命地蔵を思い浮かべるのですが、この文英様石仏の表情として基本的には円形楕円形の顔面輪郭の中に目尻の上がった三日月形の眼で、中心部の鼻は三角形の団子鼻、口は小さめで特徴のある表情をした石仏で顔面は多くの場合、半肉彫年、背後に円形の頭光をもって衣丈はすべて刻線彫で石仏を彫ってある。

この石仏の表情は素朴で、合掌している姿の中に一心に何かを祈る石仏の姿にひかれ、現地に行つてその石仏を見ようと思つて、頂いた『石ぼとけ』の本を見ながら所在地を捜して現地を訪れ石仏をカメラに収めた。

最初は文英様石仏の多く分布している所の備中高松城址跡周辺から、岡山市門前の江口家墓地、足守地区、岡山市草ヶ部、常楽寺境内、山陽盆地、中島の千光寺、尾谷地区その他の文英様石仏の所在地を訪れたのが、石仏との出会いです。

2. 文英様石仏について

この文英様石仏は、岡山市高松地域を中心とした備中東部の足守川地域に刻線彫りを主に多く分布している。

高松の地蔵院境内、星友寺境内、真福寺境内、

高松城址本丸跡に石仏があり、銘文を刻むもの35体が知られ、その中で年記銘を有するもの26体が確認できる。年銘最古の文英様石仏としては高松城址公園に祀られている天文2年(1533)の年記を持つ「客人大明神神像」の造立で、最新の作例は池の下観音堂2号石仏(岡山市)天正10年(1582)の年記銘の石仏である。

文英様石仏は天文元年(1531)から天正10年(1582)までの約50年間の内に造立された様である。文英様石仏の内「福成寺文英(記)念仏講文英筆、文英施(入)、(文)英座元と記された4体の石仏が早くから知られていたことから、固有名詞とされる。「文英」の名前をもって、この種の石仏を文英様石仏と総称されている。

3. 文英様石仏の写真と所在地

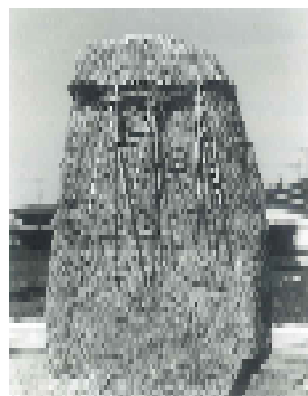
①江口家墓地内



この延命石仏は岡山市門前にある江口家墓地

内で文英様石仏の中で完成された作品とされ、延命石仏として、右手に錫杖、左手に宝珠を持って蓮華座に座っている姿で、半肉彫の様式で彫られている。石仏の高さ70cm幅60cm銘文は右側に天文四年願主、左側に八月二十四日周光と銘記されている。私が最初に文英様石仏を訪れた場所の写真です、S61年5月 筆者撮影

②高松城址本丸



客人大明神神像石仏は岡山市高松の高松城址本丸址で出土し池の下の和氣氏の庭先に摩利支天様として祀られて

いたがその後現在地に移された。客人大明神は客人権現と同一と考えられ、大津の日吉大社の祭神でもある。この石仏は左手に宝珠を持ち右手には鍵を持って財宝を守る為の土蔵の鍵とされる。

この石仏は天文2年(1534)の造立で文英仏の年銘最古のものである。石仏の高さは82cm幅43cmで摩利支天として祀られている。

③岡山市門前報恩禅寺境内



岡山市門前の報恩禅寺境内にある石仏十一面観音で、高さ68cm幅59cmで銘文として開山雲天文三年(1534)甲午三月と刻んである。その他4体の文

英様石仏がある。

また、この境内に康永3年甲午(1344)春山和尚2月1日銘文がある宝篋印塔が建っている。

④岡山市草ヶ部常楽寺参道



岡山市草ヶ部常楽寺参道に大小19体の石仏が保存されている。戦後の開墾によって裏山から発見されたものである。

裏山は大廻小廻山とよばれ、山頂近くを鉢巻状に土塁がめぐる古

代朝鮮式山城が築かれている場所である。

石仏の発見された元の場所の所在地には、阿弥陀院の地名がある。常楽寺の文英様石仏は様々な表情をもっている印象的な石仏である。

⑤山陽町千光寺付近

山陽盆地の文英様石仏については赤磐市下市から県道美作線を砂川に沿って北上すると、正崎という集落があり山裾沿いに走る町道を北東に走ると、梶谷という集落があり背後の山頂近くの松林の中に、大小3体の文英様石仏がある。



梶谷の地藏堂石仏に「道好」の刻銘が見られる数少ない銘文石仏とされている。正崎集落から南東に、山沿いに沿って町道を進むと高屋集落があり竹藪の中に6

体の文英様石仏がある。高屋集落から旧道を進むと、中島集落に入る。

この地に石井原山千光寺という天台宗の寺があり、縁起によると孝謙天皇の天平勝宝年中(749～756)に報恩大師によって創建されたと伝えられ、備前48ヶ寺の一つに数えられ、天正18年(1590)沼田左衛門大夫、同右京進によって再建されたが、享保20年(1735)火災によって堂宇を焼失し、18世紀中頃再建されたものが現在残っている寺とされている。本堂西にある古い墓地の中に永禄10年(1567)に千光寺秀盛によって造立された文英様石仏がある。(写真参照)

また、千光寺には石造美術として石造方柱碑



(板碑)が建っている。これは県の重要文化財で、暦応3年(1340)に僧覚有の三十三回忌供養の為に建立されたもので板碑に「為僧覚有三十三季暦応三庚辰二月十五

日」と銘が刻んであり、暦応3年は南朝の興国元年に当たり、この碑には北朝の年号が使用されている。この方柱碑の高さは2m、上下2つの石を継ぎ合わせ頂上は三角形で二段の切込みがあつて、身部上端に釈迦、文殊普賢三尊の種子を刻んでいる。回忌供養碑の記念碑としての石造美術である。

⑥総社市奥坂穴観音

（供養塔としての十三仏種子）



総社市阿曾から血吸川に沿って奥に進むと鬼ノ城の山裾に奥坂という集落がある。まだ現役のところ同僚の石尾宅を訪問し、その折に案内戴いたのがこの穴観音で、横穴式古墳の中に入ると、その側壁に観音像や十三仏種子が刻まれている。

十三仏信仰は室町時代に入って盛んになり、死者の回忌をつかさどるとされた仏達で、初七日の不動明王から始まって三十三回忌の虚空蔵菩薩に終わる十三回忌に配された仏であるとされ、総社市奥坂の穴観音の十三仏種子曼荼羅はそれぞれの仏に対応する梵字を小蓮華を大きく刻んでいる。大蓮弁の中央花卉には「文明十一年（1479）天周歆巳亥」と供養を受ける人物の名前が記されている。（写真参照）

⑦上房郡有漢町保月の板碑

板碑とは石造美術の解説によると、頭部を山形に作りその下に二段の切り込み額部があり、身部の下に根部を作る板状の石塔で、この形式は

鎌倉時代前期以来、板状の緑泥片岩を産する関東地方において流行した。本来は板状の塔婆であり、それが板碑と呼ばれるようになったものである。

前項で一部触れた赤磐市山陽町中島の千光寺に建っている方柱碑（板碑）も同様である。しかし岡山県内での板碑として有名なのは、旧上房郡有漢町上有漢にある高さ3.15mの石造板碑である。硬質石材の花崗岩で作られ、頂上部を三角の山形に造り碑面の上の端に額部を庇（ひさし）状に突出させるのが特色で硬質石材系板碑様式の細部について額部正面に日月を薄肉彫に並べ碑面には、上から薬師・阿弥陀・地藏の三蔵を陽刻し、下方の刻銘によると嘉元3年（1305）11月13日に願主漆間真時と結衆28人が石工井野行恒に刻ませている板碑である。



願主の漆間氏と旧久米郡久米南町の誕生寺の法然上人も漆間氏の出身であり何かの繋がりがあるか調べてみる課題でもある。

保月の板碑を造った井野行恒は宋人伊行末に発する大和の伊派石工の正系で、薩摩権守を名乗って、14世紀初期から40年間も活躍し、大和を始め摂津・紀伊そして備中国上房郡有漢町の地に保月の石塔三基、川上町備中町の笠神の文字岩を徳治2年（1307）に刻んでいる。

保月の六面石幢（せきどう）は十仏信仰から十三仏信仰に移っていく時代の石造資料として評価が高いとされている石造美術である。

4. 文英様石仏の造立した背景

石造仏に刻まれた年銘は天文2年(1533)が最古で天正10年(1582)にいたる50年間造立された。備中では天正10年には高松の役があった時代で、戦国時代最中の特に備中では織田氏毛利氏の勢力圏の争乱の世相の中で、僧文英という人物が石仏を造立し民衆の苦しさを救済しようと念仏講なる組織をつくって、自ら先達となって活躍をしている。文英は総社、井山の宝福寺の末寺、平山の福成寺の住職である。文英の刻んだ石仏銘の中に天文4年(1535)念仏講文英筆、福成寺文英の銘文の持宝院の十一面観音に天文14年(1545)三月吉日と刻んである石仏、蓮福寺の天文16年(1547)乙未3月 日、銘文は中央に厳島弁才天と左下に本願文英書と刻んである。文英の出身地の安芸国であることを示している。

念仏という六字名号の南無阿弥陀仏を称することによって救済されるという民衆の心を癒す仏教の教えと石仏を造立して拝むことで救済を願い心のよりどころとしての石仏が文英様石仏であったのだろう。

時の権力者によって拝していた石仏を壊され何百年もの間、土の中に埋もれた石仏、山里の野辺にひっそりと立っている石仏を観ると何かを感じるものがある。今まで行ったことのない文英様石仏を訪れようと思っている。

参考文献 ・吉備の文英様石仏 山陽新聞社発刊

- ・僧文英と石仏 林信男著
- ・石造美術の旅 川勝政太郎著
- ・岡山の石造美術 厳政右衛門著

「一遍聖絵に描かれる

熊山遺跡」の考察

会員 丸谷憲二

1 はじめに

平成26年11月22日の熊山遺跡一般見学会参加後、津曲真人氏から「一遍聖絵の福岡の市の背後の山に、熊山遺跡らしき絵が描かれている。以前から言われていたらしいのですが、信憑性がなく詳しく語る方にも出会えておりません。」との情報提供を受けました。

翌、11月23日に備前福岡郷土館(瀬戸内市長船町福岡)を訪問し、一遍聖絵「福岡の市」デジタル版を確認しました。一遍聖絵に熊山遺跡が描かれていました。しかし、背景への描写であり非常に分かりにくく熊山遺跡との断定は困難です。

2 一遍聖絵「福岡の市」

デジタル版の確認

山の上に熊山遺跡らしきものが見えます。「誰が熊山遺跡を発見したのですか。」と質問したところ、「皆で話をしていた熊山遺跡になった。」との説明でした。発見者の個人名は聞けませんが、備前福岡観光ボランティアガイドの皆様の発見です。

時宗総本山 遊行寺 藤澤山無量光院 清浄光寺蔵(神奈川県藤沢市西富)の一遍聖絵デジタル版です。「赤外線照射観察法という方法で、赤外線を色々な角度から照射して撮影してあるので、どんなに大きく引き伸ばしても鮮明な画像になっています。」と臼井洋輔氏(吉備国際大学)は説明されていますが、この写真が限界です。

一遍聖絵巻四は、「吉備津宮神主の子息の妻女、一遍により出家を遂げる」として知られています。この絵の背景に描かれている山中に熊山遺跡が描かれています。



右上の山中に熊山遺跡

2.1 中西厚氏の指摘

山の上に熊山遺跡らしいものはあるようですが、私には石積とは断定できませんでした。もし熊山遺跡の石積とすると、深山霊谷を描くと思いますが草木の生えていない山の上に描かれています。しかし、熊山の石積みが一遍上人の画に描かれているとは？……面白い謎解きです。

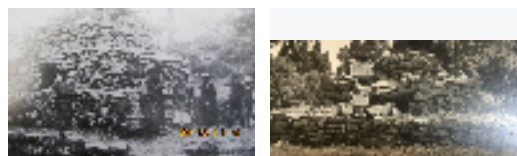
(11 月 23 日に備前福岡郷土館にて、一遍聖絵「福岡の市」デジタル版を確認後のコメント)

2.2 従來說 臼井洋輔説

臼井洋輔氏は「一遍上人聖絵 福岡の市」解析に、福岡の市の季節の説明として「落葉した梢(こずえ)、ススキと紅葉した秋草が残って、遠景に雪山を描いている。ところを見ると冬季である。」、時刻の説明として「絵巻の左上を見ると、大半の松などの樹木の上部の方がぼかされて表現されて、良く見るとその表現は上部が薄く霞むように途切れている。これは夕方黄昏時の昏(くら)いとはりが文字通り降るように迫ってきていることの表現ではないかと思われる」と「樹木の上部の方がぼかされて表現、遠景に雪山を描いている」と説明しています。

3 復元前の熊山遺跡

復元前の写真と山中の熊山遺跡の写真を比較してみましょう。復元修復は江国石材工務店(岡山市北区万成東町)により昭和 49 年(1974 年)10～12 月にかけて実施されました。



左 昭和初年頃「ふるさとの思い出」収録

右 昭和 16 年・潮見定秋氏撮影(星桃太郎氏復元)



昭和 48 年調査準備写真(岡山県立図書館蔵)

4 一遍

一遍(1239 年～1289 年)は鎌倉時代中期の僧侶。時宗の開祖。「一遍上人」、「遊行上人(ゆぎょう)」、「捨聖(すてひじり)」と尊称されます。一遍上人が遊行した 1278 年は、第一回の元寇(1274 年・文永の役)と第二回目の元寇(1281 年・弘安の役)との中間年です。民衆は蒙古が攻めてきたらと戦々恐々としていた時代です。そんな時代に一遍上人は、時衆を率いて遊行を続け、民衆(含下人・非人)を踊り念仏と賦算(ふさん)とで極楽浄土へと導きました。その生涯は国宝『一遍聖絵』があますところなく伝えています。

4.1 一遍聖絵と一遍上人縁起

一遍の行状を絵巻として描いたものが「一遍上人絵伝」です。歓喜光寺(京都府京都市山科区大宅奥山田)蔵・聖戒編の『一遍聖絵』全 12 巻と清浄光寺蔵の宗俊編の『一遍上人縁起(一遍上人絵詞伝)』全 10 巻の二系統に大別されます。現在、20 本ほどが知られています。東京国立博物館蔵の国宝も転写本の一つです。

教団の根本聖典として重要視され転写本がさかんに制作され、原本の成立は、絵巻の最後の場面が嘉元元年(1303)12 月までであり、『一遍聖絵』の奥書より、1299 年(正安 1 年)一遍の弟子の聖戒が詞書を起草し、法眼の地位にあった画僧の円伊が絵を描いたものです。

5 『一遍聖絵』(歓喜光寺蔵)による比較



歓喜光寺蔵の『一遍聖絵』です。熊山遺跡の描写が絵師により少し異なります。副本の大半が、清浄光寺蔵の宗俊編の『一遍上人縁起(一遍上人絵詞伝)』全10巻の写しです。



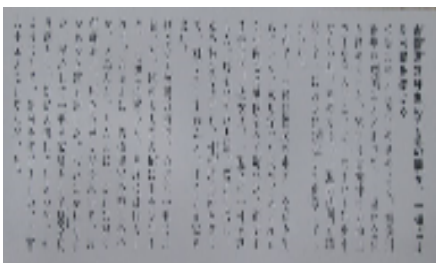
歓喜光寺蔵

清浄光寺蔵

6 まとめ

熊山遺跡は1278年(弘安元年)の記録です。熊山遺跡の初見絵図です。原本成立は14世紀初めですが、転写本がさかんに制作され、現在20本ほどが知られています。原本は不明です。

歓喜光寺蔵の『一遍聖絵』と清浄光寺蔵を比較すると、熊山遺跡の描写が絵師により少し異なります。原本に熊山遺跡が描かれていました。しかし、転写した絵師が熊山遺跡を知らなければ、このように変化した絵になります。「原本に熊山遺跡が描かれていました。」と報告します。



7 謝辞

「昭和16年・潮見定秋氏撮影(星桃次郎氏復元)」写真は、平成26年11月22日の一般見学会

会参加後、津曲真人氏より送付して戴きました。現在は熊山町図書館蔵です。

8 参考文献

- ① 『一遍上人絵伝』 清浄光寺蔵(神奈川県藤沢市)のデジタル版
- ② 『一遍上人絵 福岡の市を絵解きで文化探検しよう』
白井洋輔 備前福岡史跡保存会
- ③ 『一遍上人絵伝』 日本絵巻大成 別巻 小松茂美他
昭和53年 中央公論社
- ④ 『国史大辞典1』 昭和54年 吉川弘文館
- ⑤ 国立博物館所蔵国宝・重要文化財
『一遍上人絵巻 巻第七』
- ⑥ 「一遍上人聖絵 福岡の市解析」 白井洋輔
『文化財情報学研究第7号』 平成22年
吉備国際大学 文化財総合研究センター紀要
- ⑦ 『熊山遺跡』 潮見定秋調査 昭和45年8月11日
- ⑧ 『竪穴石室清掃及び実測』 正岡主事実測
昭和49年10月
- ⑨ 『ふるさとの思い出写真集 昭和・大正・明治・備前』
吉崎一弘・吉崎志保子編 昭和55年 国書刊行会
- ⑩ 『熊山遺跡』 岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡緊急調査概要 1974年3月 熊山町文化協会
- ⑪ 『熊山遺跡』 岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡修理報告 1975年1月 熊山町教育委員会



平成26年11月22日の一般見学会

「熊山仙人」との出会い

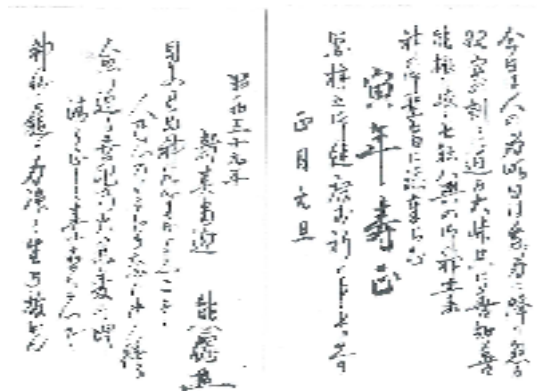
高森利夫氏（会員）の追想

会員 山崎泰二

不思議な書簡を戴いた。エッセイ風であり、人に秘めたある種の事実を私に知らせてくれているようでもある。「私のつぶやき」でどのように扱ってくれても良いと、文末に記してある。

高森利夫氏は警察行政退職後、親の代から奈義の横仙歌舞伎伝承者の活動を続けていて、趣味の域を遠く脱しその道の専門家である。

確かにどう扱えばよいのか私も迷う。高森さんが経験され、四半世紀以上も経って忘れられず、戴いた手紙なども処分できないまま保管し、私に送っていただいた。拝見して私も、昭和の末期の難しい時代に心身の孤高を守ろうと、熊山に籠もった本日の主人公＝潮見定秋氏の心境も理解できる。いや無視できない。高森氏の手際よい文章で概要は判った。



高森さんが潮見氏から戴いた年賀状（昭和 59 年）

壮年を過ぎ、ある種の悟りを求める境地の中で、家族や其れまでのすべての経歴を消し去り。昔聞いた仙人のような自給自足＝熊山の自然の恵みだけで生きていく決意で在世から隔離した生活に入った。廃屋に住み入り瞑想にふける。お腹が空くと熊山山塊を放浪し食材を得て、電灯もラジオ TV も無視した生活。遠く眼には得体の知れない浮浪者・不審者に写ったであろうことが、容

易に想像できる。

見かねて行政（高森氏は若き駐在員）が遠くで安否を確認する。それが重なりとお互いに情が湧く、幾ばくかの交流があった。それが残っている手紙である。（左欄添付参照）

一見して筆達者で教養人と判る。唯、発することばの内容が常道ではない。「神がかり」な予言者的風情もある。「迫り来る世紀の大異変」を予言し、神の啓示の話が耳から離れないと高森氏は回想している。

私の手元にも『日本沈没』『マクルーハン理論』『悪魔の飽食』など小説ふうのものやドキュメンタリー、果ては仮説的論理が世情をにぎわしていた。

若き駐在員も転勤などで現場を離れながら「気にかかる」思いを私に知らしめることになったかと、勝手に想像する。

昨今一連の政治や国民の世論・その他の風潮世情を見ていると、大陸型思考に傾いて、人間の力ですべてをコントロールできるとの過信に溢れている。日本列島の特性を生かし、そこから醸し出された「自然との共生」で生きる水耕稲作文化圏の「和の世界」が崩れつつある。との認識は浅学な私でも判る。

その意味で、潮見氏の予言＝迫り来る世紀の大異変に匹敵する時代に、今生きているのかもしれない。謎の遺跡を残した約 1000 年の昔の人々がこの山麓で「熊山仙人」と同じ教示を受けたのであれば、この熊（＝神）山の各論に一石を投げうる新しい考え方でありそうだ。

高森氏が重ねて私に資料を届けてくださった想いが判る気がする。

今は亡き「熊山仙人」に合唱し、高森氏と共に「迫り来る世紀の大異変」を考えてみたい。

素人のざれごと(戯れ言)

『日本語で生きよう!』(3)

会員 山崎泰二

21. 外来語(カタカナ語)

一般に我々は外来語と称していますが専門家は「借用語」として扱っています。日本語の文字言葉は古代中国が母体になって、話し言葉に漢文字を用いて今日がありますが、その後鎖国以前からスペイン・オランダからの通商やキリスト教布教に伴う西欧諸国のアプローチがありました。徳川幕府は幕藩体制を維持するために一部の例外を除き鎖国政策を堅持します。

それでも日本人の中には新井白石(1657~1725)(江戸中期の儒学者)のように、渡来したイタリア人の宣教師シドッチ(1668~1714)を取り調べ(聞き取り)当時の西洋事情を書いた『西洋紀聞』を文化4年(1715)に完成させた。幕末期に公表され広く流布し蘭学から洋学への指向が強まった。和訳もあるがカタカナで表記した外来語の最初といわれている。

現在外来語(カタカナ語)がどれだけ使われているのか、はっきりした数字は見当たらない、国語辞典の約10%説が有力で、6万の日本語が存在するならば6000語になる計算である。当然意味不明の外来語も多く乱用が問題になった。小泉内閣(2001~2005)になって国立国語研究所が平成18年までに4回の報告をまとめ、176語の言い換え案を提示し、官公庁やマスコミに乱用防止の警笛をならした。しかし日々新しいカタカナ語が生れるなかでは「焼け石に水」の感がある。

隣国中国や韓国もそして西欧のフランスも外来語規制に乗り出しているが、英語圏の拡大傾向は止まらない。私は規制よりは日本語の良さを学び、世界に日本文化を広める努力が大切と考えている。

22. 英語になった日本語

最近では和製カタカナ語が、日本文化の一つとして世界に発信している。経済や高い技術力に伴って自動車や電化製品、漫画やアニメなど世界の隅々まで浸透していて、子供たちの憧れの眼差(まなざ)しが眩(まぶ)しいくらいである。

古くは中国の漢字にない日本語を「国字」として逆発信した。日本固有の事象は国情が違う漢字にも外来語にも存在しない。彼らの国ことばへの翻訳が出来ないのだ。我々が外来語として受け入れた逆の現象である。

逆説的に考えれば「外来語になった日本語」こそ日本固有の文化と云える。最近話題になった「和食」などが代表格だ。大陸系は土足文化で、湿度の多い日本では上履きで「足袋」など器用な履物を着用する。洋装よりも和服の似合う畳間では、ベッドは似合わない。畳と布団がセットで生活のなかに定着している。大陸系の乾燥地帯では靴に付く汚れの具合が違うから土足でベッドも差し支えない。「タタミ」も「フトン」も和製英語なのだ。

庭には苔が生え流水が清しい。豪華なバラの英国風庭園も良いが、清楚さと落ち着きはなんと言っても日本庭園が良い。岡山には庭を芸術にまで仕上げた重森三玲(1896~1975)がいる。西川沿いを散策するのも良い。世界に発信できる日本文化は、なにも古都ばかりではない。身近に存在するのだ。日本の庭には苔が付きものだが、1900年(明治年)スコットランドの果樹園を散策した夏目漱石が「苔を見て懐かしく褒めると、イギリ

ス人は恥じ入った」と『文学論』に書いていることを金田一春彦先生の『日本語』で知った。文化の違いは色んな面で出てくる。

アイスコーヒーが外来語なら「冷（レイ）コー」は日本製のカタカナ語である。カラオケも元々「空」「桶」が語源のようだが立派なカタカナ語で世界に通用する。カラオケは岡山が発祥の地との説もあり、火鉢（ヒバチ）は和室の暖房用であるが、アメリカでは火鉢の炭火が焼肉に適していて重宝されているらしい。

吉野の葛（くず）といえは和菓子の代表格だが、道端の雑草「クズのツル」はアメリカに渡り「ジャパニーズ・スネイク＝日本から来たヘビ」と呼ばれて嫌われている。こうした用語の例はいくらでもある。

最後に日本の柔道は東京オリンピック（1964）の種目になって久しい。男女とも外人の活躍が目立つほどである。ロシアのプーチン大統領の柔道着姿が近親感を呼ぶ。そのうち相撲や軟式テニスそして箱根駅伝の「エキデン」がカタカナ語で世界の舞台に登場するかもしれない。

日本が世界平和を願うならば、「武器・戦力」ではなく「文化の発信」を戦略にして果たす方向で力を入れて欲しい。

23. はなし言葉は

古典・民衆芸能の中に

日本語には声に出す「話し言葉」と文章にする「書き言葉」が存在する。元々別の扱いを受けてきましたが、戦後一致策がとられ今日に至っている。

話し言葉は現代のように録画が取れる時代になるまでは、厳密には解らないのが事実でしょう。しかし先にも述べましたが古事記や万葉集の中に当時の会話の様子が再現できました。奈良平安と時代が下りますと、残っている文学の文章表現にも会話を想定できるでしょうが、私は「古典芸能＝伝統芸能」の中に色濃く、残っていると素人なりに考えている。

能楽の謡は室町期当時の日本語と云われます。狂言から発展した歌舞伎は江戸期大衆に大いに受け、「千両役者」「十八番（おはこ）」「幕の内」などが一般の言葉になっていて、浄瑠璃（文楽）は江戸期の大阪商人の生き様を今に伝えています。勇ましい講談の語りは戦国乱世に源（みなもと）があり、万歳の歴史は古いのですが落語は江戸期。以外に新しいのは浪曲（浪花節）で、落語や漫談そして漫才はその時々世相を反映させたテーマ（話題）を取り込み人気が高い。大学での落研（落語研究会）も盛会で社会人になっても職場仲間から人気者である。落研出身でトップスターになった桂三枝師匠（現6代目桂文枝）は私と同年ですが芸も立派で協会の会長として重鎮の一人だ。

民謡は昭和の終りには全国で5万8000曲もあった記録が残っていて、古いものや比較的新しいものまで、炭坑節や貝殻節などのつらい労働を民謡に託して歌い継いでいる。歌詞だけでは中々暗誦で来ませんが、リズムや踊りを体が覚えることで伝承されるのです。民謡は先に立石さんの活躍を紹介しました。

難しい仏教の経典も大道芸の口上にかかれれば、楽しみながら身に付き、講釈は元々仏教用語です。貴族中心の仏教が大衆に移り行く中で、大道芸の講釈師が果たした役割は評価

すべきで、集落の神仏を中心にした宮地芝居や相撲興行も、果ては農村歌舞伎も大衆を取り込み、今日まで続いている。庶民も長い台詞（せりふ）を、踊りや歌に芝居にして、一種のリズム感で身に付くのでしょうか。芸能の口承伝達は有力な文字伝承に並ぶ手段でした。単なる暗唱や暗記での記憶ではあれだけ長い時間の芸能は続きません。体で覚えるリズム感があればこそ伝承されるのです。

専門家の古典芸能も、庶民が残す大衆芸能も共に残したい文化だと思います。私はこの歳になって「沖新田一座」の立上げに参加し熊沢蕃山の役どころを経験しました。比較的短い台詞でも緊張すると、頭が真っ白になり簡単な台詞でも出てきません。大衆芸能も「話し言葉」の伝承に役立っていることを実感しました。

24. 書き言葉の日本語は

文学の華(はな)

世界文学の中でも長編の作品として評価されている『源氏物語』(円地文子訳新潮社発行巻10の箱本昭和47年初刊)の第1巻の配本を受けて同48年の正月元旦に手にした。長男が5歳で次男は5ヶ月の新生児と奥付(書物の終りに書名・著者・発行所などを書いてある)の余白に墨書の添え書きを自筆で行なっている。私の記念すべき大切な蔵書になって久しい。

学校では習っていないので、楽しみに円地文子先生の新刊本の発刊を予約して、配本を受けた若い頃を思い出す。装丁もしっかりしていて、程よくルビもあり読みやすい。当時のサラリーでは大変な出費であったと思うが妻の思いは如何程か察して余る思いだ。あれから40年改めて『源氏物語』の凄さを実感している。

さて余談になりましたが、キーン先生が若輩18歳にして『源氏物語』に接し、東洋の異国で千年も前に、女流作家がこの大作を残したことに感動、生涯の研究の道になったとの著作を拝読し、改めて再認識させられた。

ドナルド・キーン Donald Lawrence Keene

1922 生れの 92 歳 アメリカ ニューヨーク出身

現国籍は日本=2012.3.8 取得 文化勲章=2008 受

章 文学者・文芸評論家 日本の 10 大学の名誉博士

著作多数 雅号=鬼怒鳴門(キーン・ドナルド) 東京都

北区名誉区民 新潟柏崎市に記念館がある。

先生が名作として取り上げられた著作の中で、主な古典作品を列記すると。

古事記・万葉集から始まって、枕草子・源氏物

語・古今集・軍記物・新古今集・徒然草はては

能・文楽そして歌舞伎

など日本文化の古今全てにわたります。彼が選んで世界に紹介した作品が全て、世界に通用する作品だそうで、そうした日本文化の土壌がノーベル文学賞を二人も受賞しました。

川端康成(1899~1972)は1968年に『伊豆の踊子』で、大江健三郎(1935~)は1994年にそれぞれ受賞し活躍しています。これらの実績を並べてみても、日本語が日本文化に果たした役割は大きい。これからもこの日本語を大切に世界に発信して欲しい。

25. 点字も日本語

点字はフランスのブイ・ブライユ(1809~1852)が3点2行=6文字点字を考案(1829)した。日本ではそれまで凹凸の版木で文字そのものを学んでいたが、明治23年(1890)に石川倉次(1859~1944)が改良工夫し基本的にブイ・ブライユと同じ流れの「日本点字」を完成させます。



現代百科大事典 保育者 S38 年版

点字は添付したもの以外にも、外国語点字・数学点字・科学記号点字・音楽点字などがあり、日本語の重要な分野であり、若くて著名なピアニストも世界を舞台に活躍していますので、応援したいものです。

日本初の歩行者用点字ブロックが、昭和42年(1967)に盲学校の近くの歩道に、市内の旅館を経営する三宅精一(1926～1982)は友人の安全のために私費で歩道に設置したものであります。彼はその後 6000 枚もの点字ブロックを全国の自治体に寄贈しました。それを記念してモニュメント5点を2010(平成22)年3月18日に有志の手で設置されました。(下図参照)



2010.22.3.19 山陽新聞掲載

岡山人として嬉しいニュースでした。

盲人の琵琶法師が奏でる平家物語の語(かたり)は有名な話で、楽器の琵琶はインドから中国を経て奈良時代に入ってきました。特

に鎌倉期に盲僧の琵琶法師の奏でるものは、能舞台でも取り上げられ「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響き……」は敗者平家一族の哀歌だけではなく、日本人の心=魂に訴える何かを持っている。

今から5年前の2009年7月に岡山県立盲学校の中学生を対象に、エコちゃん教育(生ゴミを堆肥にする装置)の指導を行った。想像に反して闊達な挨拶に接し感動した。一定のハンディを持ちながらも、現在38名の生徒が県の内外から学んでいる。

26. 手話も立派な日本語

点字も手話もそれを必要としている人から見ると立派な言語です。しかし少数民族の言語を認めていない国はこちらも認めていません。

「手話を言語として認めます」の大きな横見出しの囲み記事が、昨年2013.25.10.5には山陽新聞で同9日には朝日新聞で掲載されました。鳥取県が県条例で正式に制定したニュースに感動した。

テレビにも手話ニュースが流れ、公的な行事や講演会では手話が付くことが多くなりました。先の東日本大震災を契機に鈍い国の動きに対して、地方が立ち上がっています。

調べてみると明治以降日本では、相手の口元を見て理解する「口話法」を採用していました。国語辞典でも手話は口話で詳しく説明しています。しかし専門家や国際的な流れの中で手話が中心になり、パソコンの変換も手話の方が便利になりました。

私の経営している会社に長く勤めていた女性事務員さんは、近くのふれあいセンターの講座を受講していて、自宅で練習していると、

まだ小さい娘さんが母親の真似をして、娘の方が、上達が早いと嘆いていました。母娘で無言の会話を想像するだけで、嬉しくなります。

まだ正式な国家資格は無いそうですが、推進する団体の認定資格に向けてのボランティア活動が続いていますが、何時起るか分からない災害にむけて、地方の立ち上がりの方が早いようです。

国際的には2006年に国連が障害者権利条約の中に「手話は言語」と明記したことで各国の動きが出ている、日本の国としての取り組みが早くなることを願っている。

弱者の住み良い街は健常者も住みやすい。老人・子供・病人なども含めた多用な対策を願うばかりです。



2013.25.10.9 朝日新聞掲載記事

27. 翻訳は著者を超える

本年度（平成26年上半期）のNHK朝ドラは「花子とアン」が視聴率も高く人気もある。『赤毛のアン』は知っていたが主人公の村岡花子が著名な翻訳者とは知りませんでした。白蓮などの有名な人物も登場していますので興味を持ちつつ毎朝を楽しみにしている。

彼女の本業が翻訳業で、西欧文化の導入以来一般人（漢学・蘭学・洋学は医学・教育・宗教などの専門分野の翻訳）が、外国文化を日本に紹介する翻訳業を仕事に携わる人が増えた。その初期の代表者がこのドラマの主人公村岡花子かもしれない。

翻訳は原語の作品があり、日本であれば日本語に表現し記述する。（このことを専門家は「原語からの到着語」と表現）私は単語の意識が出来れば文章の翻訳は簡単と思い込んでいましたが、そう簡単なものではなさそうで、人気ある翻訳家の約著は良く売れる。原語の文脈をどのように表現するかは、翻訳者の能力と手腕ならびに文才が左右する。一説に「翻訳は書き下しより難しい」とされている。書き下し文は、作家の自由な構想と発想、状況設定まで任意の文脈で展開できるが、翻訳はそうした設定・条件をクリアした上で作品を仕上げる。

原語の相手国の言葉を熟知し、文学的表現能力が備わって「立派な翻訳」が出来、読者は異国の文学に接して本の出来を判断する。

今年はイギリスの偉大な文豪セックスピア（1564～1616）が生誕して450年の節目を迎え文学界は賑々しい。彼ほど世界中いや日本人に愛され親しまれた作家はいない。その証拠に代表作の『ハムレット』の翻訳劇は文明開化と同時に始まり、文豪夏目漱石が東京帝大の講義で坪内逍遙の作品を批判して「セックスピアが著作してから300年たっても著者の心境に近付いていない」＝後に**翻訳不能説**と批判したが、あれから150年漱石の危惧を乗り越えた「ハムレット」を我々は観ることが出来るであろうか。

現代作家で日本から世界に発信している第一人者は村上春樹（1949～）といわれている。

る。40言語500点を超える作品が世界を席巻しているのだ。現代中国では「ハルキスト」と称する熱心なファンが、春樹流の流行語を作り、店名にした喫茶店も登場していると報じられている。まさに日本文化を発進し続ける第一人者である。

28. 通訳は今の瞬間を表現

通訳とは音声言語を会話とほぼ同時または直後に変換する専門家のことである。一般に逐次通訳・同時通訳そしてウィスパリング通訳の三種があり、演者の語りの区切り毎に通訳し次の語りに進むのが逐次通訳で、国連の会議のように多国の参加者が同時に会議する時には同時通訳が活躍する。首脳の会見の会場では傍に通訳者が控え小声で通訳をしながらの対談光景をテレビで見る。これがウィスパリング通訳との事である。一般には社内会議や旅行案内を兼ねた観光ガイドが通訳として同行するが、最近は携帯でのグーグル翻訳が性能をUPさせ利用者も増えているとのこと。我々は「猫に小判」の態である。

同時通訳は相応の設備とスタッフを必要とする。大都市にはそれを業としている専門業者が存在し活躍している。通常は常時二名が10～15分で交代し、スタッフが専用ボックスからコントロール機材を駆使し、参加者各自のイヤホンに求める訳語が流れるシステムである。発言は席にランプが点灯している時のみ翻訳されている。テレビ中継もこの視点で観ると一興であろう。

29. 速記は役目を終えたか

国会の中継で議長の下に陣取っているスタッフが速記者で、帝国議会（1890）が始まって以来衆参議会事務局は、速記養成所で人材

を育て来たが、2005年に養成者募集を止めてしまった。西洋式文化や制度が導入される中で帝国議会に近代速記術が日本語版としてスタートできたのは画期的な成果である。

現在衆参議会に300人が4人で1組になって、5分交代で発言をそのまま正確に記録している。議事録にして保管するまでが彼らの仕事である。NHKニュースは1分で240文字程度です、普通の日本語文字を書くのには30～40文字程度ですから、彼らの能力・技能は並ではありません。

裁判所も同様な仕組みであるが、1997年に録音でも良いとの判断を下したので、方向としてはこちらも電子化の方向に替わっていくのでしょう。一般社会では実質上役目を終えています。

30. 新しい会話語の

コミュニケーション

私と同年輩（若干若いかな？）の歴史系の仲間に丸谷憲二氏や稲見圭虹氏がいる。私もパソコンのメールの交信で、音声電話の回数は減った。急用で無い限り、必ず伝わる安心感が重宝している原因だ。

最近彼（彼女）らがフェイスブック＝FBなる新しいコミュニケーションに参加していて、自分の似顔絵（写真？）と共に「FB仲間」と称して、一種の会話（交流）を楽しんでいる。私にも好意と善意の参加アドバイスを戴いた。「仲間からの反応が早くて的確」「本音で何でも語れる」などが主な理由のようだ。

紹介された内容によると、とても日本語の会話とは言えない。断片的言語の羅列で、(^.^)などが随所に登場して、ミーハーの小娘の会話を「FB仲間」で行っているとしたら、私には思えない。

暫らく前まで「ツイッター」とか「ブログ」と称した類（たぐい）であろう。新コミュニケーションの一種である。少し古い(1988)『イミダス』誌には掲載されていないので、正に最先端の流行（はやり）とは思うが、「もっとしっかりした日本語で会話をしようよ」と投げかけなくなる。「話し言葉」しか持たなかった先史時代の日本人の会話が偲ばれる。

古稀を過ぎる年代の老害（ろうがい）かもしれない。

あとがき

今回のテーマ『日本語で生きよう』は、日本語の生い立ちとその高い文化性を自覚して、もっと積極的に或いは自信を持って、グローバルな世界に生きたい。そうした自分の思いを中学生に、伝えておこうとの一念でスタートした。普通に話していることでも文章にすると大変です。用語の確認とか歴史的定説、未確認の正式用語が次々に現れ、ある意味で私自身が学びながらの執筆になりました。

知っている積りでも一步踏み込みますとそこは学びの世界で、論文ではなくエッセイ風としましたのもある意味当然のことかもしれません。若者に「これだけは知っていて欲しい」との想いが次々に広がり、今回は30項目になりました。事実や実証は定説を確認して居ますが、不備な点もあるかも知れません、ご指導いただければ幸甚です。それ以外は私の雑多な人生経験を織り交ぜてまとめてみた。

この拙文は項目ごとに短編となるようにし、連続性のある並べ方になっていません。興味のあるところから拾い読み戴けばと思って居ます。日本語を論じながら横書であることに抵抗があると思います。山陽新聞主催の講演会で法政大教授の金原瑞人先生は「日本語は

古来縦書きを原則とする言語」だが「横書は西洋文化と共に幕末に成立する翻訳が大きく関与」し「異文化との衝突の産物」と教えていただきました。現在国語以外の主な教科書は横書きです。

今回特に参考になったのは、四半世紀以上続けている新聞切り抜きで、テーマが多岐に亘りますので切り抜きファイルも何冊かに跨り、再読しながら遅々として進みません。転載記事はその都度出处を明らかにしました。愛用している広辞苑第三版（岩波書店）は今回も大変役に立ち学びの源です。

私の身近な先輩で、古代史に関しては矢吹壽年氏に、『足の民と手の民』の著者でもある中山亘氏には、社会文化比較論に関すること、青江信男氏には同じ吉備穴海の沖新田で生活している先人として、各々の先輩にアドバイスを戴きました。青江氏は下書きを見て、中学生を対象にしているようだが「楽しく読めるモノ」でもなく、「正直疲れた」との厳しい第一声でした。私自身の未熟さと浅学のなせるもので、深く反省しているところです。

中山亘先輩には、そうした私の未熟さを、親切丁寧に指導アドバイスならびに示唆を戴き、やっと仕上げる事が出来ました。出版経験に基づいたアドバイスは、タイトルや見出しの付け方など一言一言が私にとって貴重な経験になりました。

矢吹壽年氏は、私の拙論を補完する意味でタイムリーな論文を”きび考”11号に寄稿され、特に漢字の読みは「漢音より呉音の方が先きに列島に伝来した」との教示を戴きました。

主なお三方に厚く御礼申し上げます。そして中学生の皆さん、今は直ぐに理解できなく

でも、大人になる学びの中からこの拙文を乗り越えて欲しいと願って居ます。

“あとがき” 追補

最近になって文章の「ます」「です」調が多いとの指摘を戴き、再読して極力修正しました。なるほどと改めて文章力の未熟さに身を持って感じ入っています。ご指摘ありがとうございます。

仲間からのコメントも戴きました。

その中の一部を紹介させていただきます。
兵庫歴史研究会の重鎮阪本信子氏からは
〈古代専門かと思っておりましたが、「日本語で生きよう!」などを拝見し、守備範囲の広さに感服しております。文章も読みやすく、私の知りたかったことが要領よくまとめられており、大いに参考にしております。私、昨今超多忙の為、読書時間も少なくなっておりますが、山崎さんの論文は実にコンパクトで、一気に読み上げました。「次号を期待します」は早過ぎますか。〉

津山で観光ボランティアをしている中村晋也氏からも直接お電話を戴きました。何より原尾島の田中康之ご夫妻が、老人仲間の元中学校長が後輩に副読本に紹介したいとの伝言を戴き、素人なりに嬉しく感じ入りました。多数の仲間のアドバイスが励みになります。この場を借りてお礼申しあげます。

主な参考文献 (すべて私蔵分)

日本の歴史 全12巻 朝日新聞社
日本の古代 全9巻 中央公論社
日本文学の歴史 全6巻 ドナルドキーン著
中央公論社
日本文学史概説古典編 有精堂
日本の古典 現代語訳 全21巻 学研
明治の古典 全10巻 学研

万葉を考える 梅原猛著 新潮社
古事記 田辺聖子著 集英社
源氏物語 全10巻 円地文子著 新潮社
足の民と手の民 中山亘著 吉備人出版
考古ファンのじゃれごと集 山崎泰二著
新弥生紀行 朝日新聞社
広辞苑 第三版 岩波書店
現代百科大事典 保育社
イミダス 1988 集英社
朝日新聞社日刊紙 (切り抜き集)
山陽新聞社日刊紙 (切り抜き集)

“きび考” 10号掲載

1. 日本民族の起源を考える
2. 弥生末期の日本人は大陸と交流
3. 陸文化を無視続けた古墳時代
4. タミル語が黒潮に乗って…大野晋説
5. 古事記と万葉集でみる
6. 歌と踊りで伝承
7. 文化の発展が文字を必要とした
8. 文字は仏教経典(お経)で学んだ
9. 弥生語と漢字の融合
10. 近隣国の言語の事情
11. 日本語の二重構造(真名と仮名)
12. 閑話休題(5編)

“きび考” 11号掲載

13. 日本語文字の導入から今日まで
14. 公用語と国語(日本語)
15. 紙 paper のこと
16. 製本は手書きで写書し写本
17. 印刷技術の発発展
18. 常用漢字と現代
19. 方言でないアイヌ語
20. 方言で地方文化を守ろう

連載＝四国八十八ヶ所めぐり

「歩き遍路の旅」10

会員 樋口俊介

菩提の道場 (伊予の国) その2

40番(観自在寺)～65番(三角寺)の
合計26ヶ寺「愛媛県」

旅も半ばを迎え、菩提の道場(伊予の国)へ。
札所間の距離が2番目に長い、43番(明石寺)から、第44番(大宝寺)をうち、
難易度が高い方の第45番(岩屋寺)を終えると、
いで湯の里である道後も直ぐに近い。

当日に歩き、お参りするお寺に関する由来とか、
伝説等の内容を分かる範囲で説明と、歩き遍路
中の出来事等を含めて書き、必ず最後まで歩き
通します。

第34回

平成23年4月11日(月)～4月12日(火)

内子から石鎚南麓へ(十夜ヶ橋～父二峰)

歩き(ウォーキング)遍路 札所0ヶ所
1泊2日 約39km

筆者紀行

○一日目は前回歩いてきた、十夜ヶ橋から大瀬
郵便局近くまでの約20kmを歩く

5時に起床し、朝食を済ませ準備等を行い、家
を5時55分に出て、岡山駅発のバスに「山幸」前
で乗り、倉敷を経由して瀬戸中央道に上がり前
回歩き終えた所へと走る。

本日の参加者は35名とスタッフ、先達さん等含
め39名でした。松山自動車道の大州ICで下り前
回歩いて十夜ヶ橋に10時38分に到着する。当
日の行程、内容の説明を受け、軽い準備運動を

各自でする。

10時50分に歩き出すも43番(明石寺)から、次
の44番(大宝寺)までは約70kmある。今日と明
日で約40kmを歩く予定で、残りを次回で歩く様
にしています。

歩いている時は、あまり先のことを考えずに、
一歩前に進む、そうして美味しい空気を受け、周
囲の景観、恵まれた自然環境の中での変化等を、
身体で感じ満喫する喜び、此れこそが歩いた人
しか、味わえない楽しみです。



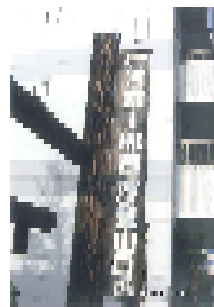
そして四
国の皆さん
の温かい応
援、心づか
い等が、疲
れを忘れ歩

く元気を貰ってる感じです。

歩きの中では色んなものを差し出して下さる
事が有ります。これを「お接待」といって、ほかの
街道では見られない、四国遍路特有の文化を形
づくっています。

途中で休憩を一回して、13時05まで歩き、バ
スで近くの、お店に行き昼食をする。(13時20分
～13時45分)

午後は14時03分から歩き初める、30分くらい
歩いて途中の内子座で、中を少し見学させてもら
い、建物の凄さ外観を見物する。この建物は「大
正五年」(1916)に、大正天皇即位の大典を記念
して建てられた歌舞伎劇場です。



曾我十郎首塚登山口の前を通り海津見神社
でちょつとお参りして、16時に大瀬郵便局の近く

まで歩き、10分休憩して再度、歩き本日目的地に16時55分に着く。

バスで今日の宿泊先へ、山間部で静寂の中で青々とした木々の揺れ、何処からともなく鳥の声や川のせせらぎが聞えてくる、久万高原町の古岩屋荘に17時40分に到着する。

早速に準備をして温泉に入り、本日の疲れを癒す最高の気分、その上に外の風景が心や気持ちを穏やかに導いてくれ最高の贅沢です。

美味しかった夕食を皆さんと和気あいあいに頂き、あとは部屋で色んな事を大いに議論し楽しい有意義な時間を過ごす。0時30分に睡眠

なお本日の歩数は32,701歩でした。

○2日目は前日に歩き終えた大瀬郵便局の近くから、父二峰までの約19kmを歩く

6時05分に起床し朝食を済ませ、7時45分にバスで出発し前日に歩き終えた大瀬郵便局の近くに8時50分に着き、トイレや準備運動を行ない9時10分に歩き始める。

道路の左右や山々の、見事な桜の花を鑑賞し、あれ凄く綺麗ねと何人かの声を聴き自分も同じく感じ取り、そよ風を受け周囲の景観に溶け込み道筋の草木の青々として元気な生命力を感じ自然の中での、遍路はこの上ない楽しみです。



筏流しの「川登」を通り、近くの公園内の見事な紅白の八重桜を鑑賞し、楽水大師で少しお参りして道の駅でトイレ休憩を行ない、約1時間ぐらい歩いて13時05分からバスにて久万町内で近くに有る店で昼食をする。(13時25分～14時05分)

再度バスで戻り14時25分から歩き始める。最近出来た出合橋(今日までの色んな人の事を思いだす)渡り、桜を眺め美味しい清らかな空気

を受けて大宝寺へと歩き続ける三島神社を過ぎて真弓トンネル(710m)抜けて、本日の目的地である父二峰橋に15時50分に到着する。



16時10分にバスに乗り一路岡山へと走り松山ICに上り高速道路で途中の豊浜で少し休憩し早島インタで下り倉敷を経由して「やま幸」で下車する。

我が家には21時10分に帰宅する。今日も無事で完歩でき、皆さんに、家族に、自分に感謝です。直ぐに風呂に入り疲れを癒やす。

なお本日の歩数は30,527歩でした。

合計約39kmで63,228歩でした。「一日目32701歩」「2日目30,527歩」

第35回

平成23年5月9日(月)～5月10日(火)

山間の難所に挑む(父二峰～三坂峠)

歩き(ウォーキング)遍路 札所2ヶ所

1泊2日 約33km

44番(菅生山)大寶寺「だいほうじ」

所在地＝愛媛県上浮穴郡久万高原町菅生

2-1173-2

電話＝0892-21-0044

本尊＝十一面観音菩薩

開基＝明神右京・隼人

宗派＝真言宗豊山派

○寺は大宝元年に、百済の僧がこの地に草庵を結び、十一面観世音を安置したのがはじまり。のちに年号にちなんで「大寶寺」として創建。仁王像は、町の重要文化財。杉の太木に覆わ

れた境内は昼も薄暗い。

◎十一面観音菩薩について

観音菩薩は姿を変えて衆生の願いに応じてくれるという。多くの面は、救済の多様性を表している。

45番(海岸山)岩屋寺「いわやじ」

所在地＝愛媛県上浮穴郡久万高原町

七鳥1468

電 話＝0892－57－0417

本尊＝不動明王 開基＝弘法大師 宗派＝真言宗豊山派

○木の不動明王だけでなく山も本尊としているは、弘法大師が刻んだ石の不動明王を山の岩に封じ込めたからといわれている。この山には七種の霊鳥が住んでいたことから、古くより「七鳥」という美しい地名で呼ばれている。

◎不動明王について

災を背負い右手に剣を持ち、怒りの形相で悪をこらしめる。仏道を全うして煩惱をも打ち砕く。大日如来の使者である。

筆者紀行

○一日目は前回歩いてきた、父二峰から(45番)岩屋寺までの約16kを歩く。

山幸発 7 時 5 分のバスに乗り両備バス倉敷を経由して、本日の参加者32名と特に元気で博学でもあり、遍路についても詳しい松本先達さんで、瀬戸中央道の早島インタで上り途中にて休憩を取り、松山ICで下りて前回歩いてきた父二峰に11時13分に到着する。

当日の難関なコース(遍路道、峠)等の説明を受け、各自で軽く体を解して準備を済ませる。

11時24分から歩き始める今日は遍路道が多いと思うが急坂の多い農祖峠にと、覚悟して約1時間30分くらい歩く12時55分からバスで久万高原

町内の店で昼食をする。



再度バスで歩き終えた所へ戻り13時48分から歩き始めるが何と空気のおいしい事、暫くして坂を上り始めるも周囲の静けさ、鳥のなき声、水の流れの音、青々とした草木等の自然の中を歩く事が最高の幸せを感じるひと時です。

しかし農祖峠(標高651m)と裏八丁峠の2峰を越えての歩きは非常に大変でした。特に下りは落ち葉の上を歩くので滑りやすく怖いですが、どうにか本日目標地の(45番)岩屋寺に17時23分到着する。

岩屋寺には「法華仙天堂跡」や、納経所の左横には「穴禅定」と呼ばれる洞窟があり、手すりがついているのでそれを頼りに入ってみると、そこには弘法大師が掘ったという湧き水「独鈷の霊水」と「かなえる不動」等と大師堂の横にある門から細く狭い山道を登ると「逼割禅定」の入口がある。不動明王を本尊としているが、同時に、なんと山全体も本尊としている。



17時を過ぎているので線香、ロウソクは上げられず、しかし本堂と大師堂にお参りには心を込めて大きな声で読経とお願い事をする。

近くに待機していた所まで歩き18時02分にバスで宿泊先に18時21分に到着する。直ぐに風呂に入り疲れを癒し食事を頂く、何時もの様に10人位の方々と世間一般の事や人生論での、奥深い議論等を12時30分に睡眠する。

なお本日の歩数は28. 659歩でした。

○2日目は前日に歩き終えた(45番)岩屋寺から 三坂峠までの約17kmを歩く

6時05分に起床し朝食を済ませバスで7時45分に出発する。前日に歩き終えた岩屋寺の近くで下車する。昨日の疲れが少し残るが、気持ちを引き締めて気分も新たにして、軽い準備を行ない8時05分から歩き出す。



前日と同様に遍路道ではある、急な坂あり下り有りが続くが土や落ち葉の上を歩く事は身体には優しく、そして特にせせらぎの音や澄んだ空気でのオゾン进行を十分に吸い込み、自然の恵まれた環境の中での歩きは、疲れよりも勝るものがある様に感じます。

(44番)大寶寺には11時20分に到着する。

本堂と大師堂にお参り、大きな声で読経とお願い事をする。八十八ヶ所のちょうど半分の44番札所「大寶寺」半分であることから、通称「ヘソ寺」と呼ばれているらしい。

保元元年(1156)に、脳の病に苦しむ後白河天皇の勅使が、この寺を訪れて病氣平癒を祈願する。その後、病が治り成就したという。そのため、この寺では病氣平癒を祈願する人が多とか。なかでも脳の病氣靈驗が有ることから、近年は受験生の参拝も多いらしい。納経所で弘法大師ゆかりの、薄茶色の皮の「おくま饅頭」を売っています。アンコがたっぷり入って美味しいです。あと少し歩き12時10分からバスで近くの店に行き昼食をする。

再度バスで歩き終えた大寶寺の近くに戻り、13時20分から歩き出す。午前中は曇り空でしたが、昼からは雨が降り続く中での歩きも風流で楽しいものでした。しかし登り下りは足が滑り大変でした。途中の久万大師でお参りを済ませて、本日の目

的地の三坂峠には15時55分に到着する。



16時03分にバスに乗り一路岡山へ豊浜で休憩を取り、早島インタで下り倉敷を經由して我が家には19時25分に帰宅する。特に今日は右足に豆が1個でき両足の膝が少し痛い。直ぐに風呂に入り、足を揉みほぐして疲れを取り除く、気分の方は清々しく達成感あり。

自分の身体に感謝！家族に感謝！有り難う！

なお本日の歩数は31.396歩でした。

合計約60.055歩です。「一日目28.659歩」「2日目は31.396歩」

第36回

平成23年6月13日(月)松山中心部をめざして (三坂峠～浄土寺)

歩き(ウオーキング)遍路 札所4ヶ所
約18km

46番(医王山)浄瑠璃寺「じょうるりじ」

所在地＝愛媛県松山市浄瑠璃町282

電話＝089-963-0279

本尊＝薬師如来 開基＝行基 宗派＝真言宗豊山派

○本堂は天明五年(1785)の再建。本尊は行基が刻んだ薬師如来。寺の創建は和銅元年(708)。薬師如来の別名「瑠璃光如来」から、寺号を浄瑠璃寺と名づけたそう。境内には、仏足石以外に説法石などの石もある。

◎薬師如来について

人間の病苦を癒しこころの苦悩、厄を取
り除くなど12の誓願をあらわす如来で、四国霊
場にはいちばん多く祀られている。

47番(熊野山)八坂寺「やさかじ」

所在地＝愛媛県松山市浄瑠璃町八坂773
電 話＝089－963－0271

本尊＝阿弥陀如来
開基＝役行者小角
宗派＝真言宗醍醐派

○修験の開祖である役行者小角が山岳修験の
道場として開基され、大宝元年(701)伊予の
国司越智玉興が文武天皇の勅願寺として創建
した。本尊の阿弥陀如来は僧心僧都の作。山
門の天井に極彩色の天井絵がある。

◎阿弥陀如来について

寿命無量、光明無限の仏。絶えることのない
生命力と輝きをもつ。「南無阿弥陀仏」の念仏
を唱える者をすべて極楽へ導く。

48番(清滝山)西林寺「さいりんじ」

所在地＝愛媛県松山市高井町1007
電 話＝089－975－0319

本尊＝十一面観音菩薩
開基＝行基
宗派＝真言宗豊山派

○仁王門をくぐり正面に本堂、右手に大師堂、右
手に納経所がある。天平13年(741)に、行基
が開創し、その後、弘法大師が現在地に寺を
移し、十一面観音菩薩を刻んで御本尊として
安置。48番霊場と定めた。

◎十一面観音菩薩について

観音菩薩は姿を変えて衆生の願いに応えてく
れるという。多くの面は、救済の多様性を表し

ている。

49番(西林山)浄土寺「じょうどじ」

所在地＝愛媛県松山市鷹子町1198
電 話＝089－975－1730

本尊＝釈迦如来
開基＝恵明上人
宗派＝真言宗豊山派

○孝謙天皇の勅願により恵明上人が開創された
寺で、本尊は行基作の釈迦如来。その後大師
がおとずれ、札所に定められた。本堂に安置さ
れている空也上人立像だけでなく、本堂、本
堂厨子も重要文化財に指定されている。

◎釈迦如来について

仏教の開祖で、釈迦族の聖者という意味から
釈迦牟尼とも呼ばれる。誕生してすぐに七歩を
あるき天地を指したと伝わる。

筆者紀行

5時に起床し、友達車で山幸の駐車場に行き、
7時10分のバスに乗り倉敷を経由して、参加者3
2名と先月の松本先達、運転手、スタッフ等の合
計36名で、瀬戸中央道に上り児島ICを過ぎ松
山ICで下りて、前回歩き終えた三坂峠に10時38
分に到着する。

本日のお参りは4ヶ寺のため大変に忙しいと
思います。10時47分から歩き始める。途中の遍



路さんの休憩所を通り過ぎ、なだらかな遍路道を
下り坂本屋(古い建物で明治末期から大正初期
に建てられた遍路宿)の前を通り、弘法大師の網
掛石(昔、弘法大師が大きな石を網に入れて、オ
ウク「担い棒」で担っていた所、オウクが折れて山

へ飛んで行きました。一つは下の川に落ち、もう一つはこの石であると言われていいます。)を少し見学して休憩する。



13時05分に**46番(浄瑠璃寺)**に到着しすぐにお参りを済ませて、昼食(弁当)をする。14時02分に出発し出口橋を渡り、釈大師の前を通り一願弁天を過ぎて、47番(八坂寺)「極楽往生通行手形授与の寺」には14時13分に到着し、本堂、大師堂にお参りする。

なお寺の名前は八坂神社とは関係がなく、8つの坂を切り開いて建てられたことから48番札所は「八坂寺」と名がついたそうです。

途中で河野衛門三郎の子供8人の八塚郡集古墳、別格第9番(文殊院)、札始大師堂等へ寄ってお参りを済ませる。

16時31分には48番(西林寺)に到着する。直ぐに心を込めて、本堂、大師堂で大きな声で読経をして、お願い事をする。



西林寺は川の土手よりも低い位置にあり石段を下ったところに仁王門がある。お遍路道よりも境内が低いのは八十八ヶ所中、唯一ここだけ。不信心な者は、山門への石段を下りると無縁地獄に堕ちるといわれている。そのため、伊予の関所寺と呼ぶ人もいます。

奥ノ院には「杖の淵」がある。弘法大師が干ばつに苦しむ人々を救おうと錫杖を地に突き刺してみると、清らかな水が溢れ、とたんに泉になったという。その泉が「杖の淵」で、今でも美しい水が湧き出し、日本の名水百選にもなっている。

今日の最終目的地である49番(浄土寺)に向け16時55分から歩き出し、17時45分に到着する。17時を過ぎていたので、線香とろうソクは上げられず本堂、大師堂では皆で力を込めて大きな声で読経を唱え、お願い事を伝えてお参りする。なお裏には八十八ヶ所洞窟の五百羅漢がある、しかし時間がなく拝観出来ず大変に残念でした。次回を楽しみにしています。



この寺で空也上人が3年間滞在したことでも有名な寺であり、京都の六波羅密寺でも有名な「空也上人像」。口から小さな6体の仏像が出ている有名な仏像なのだが、ここ浄土寺にも同じような仏像がある。重要文化財に指定されていて、境内の説明板にも写真がある

なお空也上人といえば、念仏踊りの開基で、南無阿弥陀仏の念仏を世に広めるため、全国を行脚した人物である。

18時12分バスに乗り一路岡山へ瀬戸中央道の早島インタで下り倉敷を経由して、我が家には22時20分に帰宅する。

直ぐに風呂に入り疲れを取り身体を癒す。
家族に感謝！ 自分の体に感謝！ 有り難う！

なお本日の歩数は32,286歩でした。

吉備児島と神武天皇聖跡

高嶋宮伝説地の考察

会員 丸谷憲二

1 はじめに

『古事記』(712 年成立)の国産みにおいて、イザナギ・イザナミが大八洲を産んだ後、児嶋、小豆嶋(あづきしま)、大島、女島、知訶島(ちかのしま)、両児島(ふたごのしま)を産む。『日本書紀』(720 年成立)には吉備子洲(きびのこじま)、子洲(こしま)とある。何故、国産み神話に児嶋が収録されたのかを考察したい。

2 国産み神話に何故、吉備児嶋が選ばれたのか

『古事記』の「然後還坐之時」に注目したい。知訶島(ちかのしま)が五島列島である。福江島を大知訶(おおちか)と呼び、上五島の島を「こちか」と呼んでいた。五島列島の北に小値賀島(おぢかしま)がある。最後の両児島は五島の南西に浮かぶ男女群島説がある。

小豆島と児嶋が黄蕨(吉備)国に属し、知訶島が五島列島である。つまり、黄蕨国から五島列島の間を意味している。黄蕨国のみが小豆島と児嶋の2島収録されている。大和政権にとって瀬戸内海と吉備の穴海が最も重要な場所であったことを意味している。

謂大八嶋國。然後還坐之時。生吉備児嶋。亦名謂建日方別。次生小豆嶋。亦名謂大野手(上)比賣。次生大嶋。亦名謂大多麻(上)流別【自多至流以音】次生女嶋。亦名謂天一根【訓天如天】次生知訶嶋。亦名謂天之忍男。次生兩児嶋。亦名謂天兩屋。【自吉備児嶋至天兩屋嶋并六嶋】

2.1 亦名謂建日方別とは

吉備児島の亦名が建日方別(たけひかたわけ)とあり意味不明である。解説に挑戦した5説を紹介したい。金甲山頂の郡神社の旧址と国津神社

の調査が必要である。

① 山崎多喜男説 昭和50年

「児島には建日方別を統治指導者に置いた」ことです。

② 池田潤説 平成23年

吉備児島は、ほぼ北緯34度30分に位置し、神武天皇が橿原宮を築いた「六合(くに)の中心(もなか)」である大和の畝傍山(うねびやま)の真西に位置している。そのことは、この島の別名である建日方別(たけひかたわけ)の中に「日方(ひかた)」と記されていることから明らかである。かつて、神武天皇が東征の時に立ち寄った筑紫国の岡水門(おかのみなど)を詠んだ万葉歌に、その場所を「日方吹くらし」と歌っていた。この日方は太陽の方向から吹いてくる風を意味していたが、建日方別の日方はむしろ、その文字通り太陽の方向を言うのであろう。まさにここは「六合(くに)の中心(もなか)」である大和の畝傍山からは、春分や秋分の特別な夕日が沈んでいく方向に当たる。

③ 藤井駿説 昭和48年

吉備津神社の岩山宮は建日方別を祀る。社伝では岩山宮は、「児島の国魂(くにたま)」を祀ると伝え、神体も巨巖であるという。おそらく吉備の磐座(イワクラ)の信仰ではあるまいか。

④ 永山卯三郎説 昭和3年

金甲山頂に郡神社の旧址存す。祭神は建日方別である。

⑤ 岡山県児島郡誌説 昭和52年

国津神社 児島の国魂にして大氏神なり。宝物として鏡一面、矢一本あり。

3 児島の屯倉

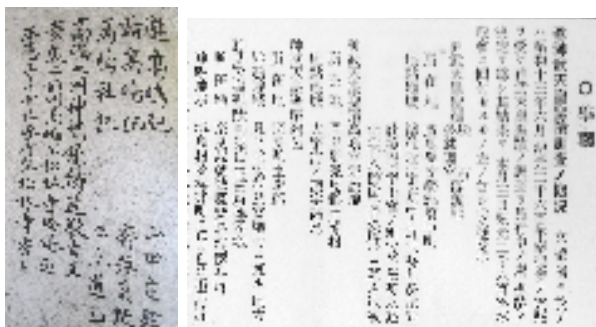
583年の百済から渡り来た日羅らが「児島屯倉に行き到る」に注目したい。児島屯倉は海路に臨む迎賓施設の性格を予測させる。「吉備児島駅館跡」と言い換えても良い施設である。博多湾にあった迎賓館と同じように、外交使節にとって重

要な瀬戸内に設けられた宿泊施設であった。児島屯倉の所在地は不明である。永山卯三郎説の「金甲山頂に郡神社の旧址存す。」は、6 世紀末頃の須恵器が出土し、駅館跡の姿が見えてくるならば児島屯倉跡と推定できる。

4 神武天皇聖跡高嶋宮伝説地説

「高島についてはいろいろ史家の間に議論があったが、昭和 15 年の紀元 2600 年祝典にあたり、児島郡甲浦村の高島がその遺跡伝説地ときまり終止符が打たれた形となった。」と巖津政右衛門氏は報告している。昭和 15 年 5 月 6 日(月)官報第 3996 号である。

しかし、山崎泰二氏は地元の伝承を調査され「明治 18 年 8 月 5 日に明治天皇が三幡港に上陸され、ここが吾等の祖先の神武天皇謂れの地かと発せられ、同席していた伊藤博文公は早速当時の文部省に命じ、官報で神武天皇聖跡高嶋宮伝説地と交付。」と当時の経緯を報告している。文部省は伝説地であり詳細な調査不要と考えたようである。文部省の調査不足を指摘し、地名学による文献調査結果として水戸光圀説と世良長造説の笠岡市神島神社説を正しいと報告する。高島神社は 1713 年(正徳 3 年)には高嶋大明神と記録され、『詣高嶋記』に、「備前国児島郡高嶋社者春日霊神也」とあり、1803 年成立の『吉備温故秘録』も「所祭の神を南都春日と同じといふ。」「一説に神武天皇・・・」と報告している。



5 竹島と竹島神社

1842 年成立の『東備郡村志』に、「高島。一名竹島」とある。『岡山県児島郡誌』に竹島神社が収録されている。竹林栄一氏(岡山県立博物館)も、昭和 3 年の『児島郡神社誌』には「甲浦村大字宮浦に鎮座する旧村社竹島神社・・・」と記録している。これは氏子達が神武天皇聖跡高嶋宮伝説地説を拒否し、島名と神社名を変更したと考えたい。

6 磐座(イワクラ)信仰

高島の中央から南寄りの海拔 300m の岩磐山に磐座、祭祀跡がある。高さ 3.65m の方柱状の巨石が立ち、周囲にも巨石が配置されている。「一見自然の岩塊のようであるが、この平たい石の中には牡蠣の殻の付着したものがあるから、海岸から運び上げて配置したものであることは明らかである。」と報告されている。中央の立石の周囲から鉄族などの小鉄片等が多数発見されている。土器から見た高嶋遺跡の年代は 5 世紀末～6 世紀初頭の比較的短期間の祭祀と報告され、航海の安全祈願と推定されている。



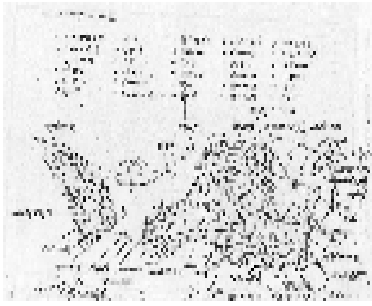
祭祀遺跡の立石



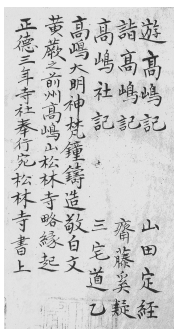
北斗七星降臨伝承

7 北斗七星降臨伝承

1713 年(正徳 3 年)の『黄蘗之前州高島山松林寺略縁起』に、「仁寿元年(851 年)安行僧都と云人南都春日明神にまつでて通夜したまふ其夜の夢に一の島に至る其島の形三曲七堆にして宛も北斗七星の列次のことし忽に一人の老翁現て曰、此所は観音大士垂迹の地北斗七星降臨の島也。」とある。この縁起は 1721 年(享保 6 年)成立の『備陽記』と『岡山県児島郡誌』に収録されている。



8 備前国の最古の記録



推古 30 年(622 年) 1713 年(正徳 3 年)の『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』の「黄蕨之前州」は備前国の最古の記録である。推古 30 年(622 年)には備前国が成立していたという記録である。推古 30 年(622 年)成立の『先代旧事本紀大成経』巻第三 陰陽本紀に、「此神座黄蕨前国一宮矣、潤世界神、有威徳神」と記録されている。

8.1 高島の早蕨(さわらび)の記録

1842 年成立の『東備郡村志』に、『大成経』に追記して「今も、此島蕨甚だ多く、又其苗甚だ早く、春雪を破て出づ。高島の早蕨とて佳産とす。味ひ亦他所のものに勝て尤も佳なり。季春長じて其茎七八尺に至る。一丈計なるも稀には有べし。上古には一丈余なるも生ぜしか巫(ぶ)べからず。」とある。昭和 15 年の水原岩太郎氏の『児島参修高島考写』にも、「此の島の蕨は古来高島の早蕨と称して其の風味の佳良なるを人口に膾炙して居る事である。彼の備前国内の名物を列記せる備前往来なる書にも高島の早蕨」と記録している。此の蕨は現在も自生しているとのことであり、来年訪問し現物確認し半田山植物園へ鑑定を依頼したい。

8.2 高島の早蕨(さわらび)を確認しよう

蕨は春の代表的な山菜であり、ワラビ採りの時期は 3 月末～6 月初です。蕨は世界各地の温帯から熱帯まで広く分布し、若い葉を食べる習慣は

ヒマラヤ中腹、ネパールから中国南部に及び、中国、朝鮮半島、日本など登用で広く利用されている。天平ら 6 年(734 年)の正倉院文書『造仏所作物帳』にも蕨が記録されている。ワラビ科ワラビ属の多年生のシダ。山地の日当りのよい乾燥地に群生。早春、地中の根茎からこぶし状に巻いた新葉を出し、これが「さわらび(早蕨)」です。



「高島の早蕨」の種類の特定の必要です。高島へ渡り写真撮影と現物を採取し半田山植物園へ鑑定を依頼します。荒城祥智 松林寺住職も「自分の背丈ほどある。」と説明されます。「澱粉を取ったあとの繊維は水に強く、ワラビ縄として利用されていた。好条件では長さが 2m 以上にもなり、若い拳状の時期は柔らかで味が良い。」とあり、「一丈余なるも生ぜし」「自分の背丈ほどある」との説明に合致します。しかし、誰も写真撮影されておられません。それほど、身近な山菜だということです。

9 『備陽記』の松林寺 備前国分尼寺説

1721 年(享保 6 年)成立の『備陽記』は、池田家文書の『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』を紹介している。『備陽記』は岡山藩領の初めての本格的な地誌であり、備前地方史研究の第一の手引書である。松林寺は高嶋遺跡見取図に高嶋神社の隣が松林寺跡であり、高嶋神社の別当寺(江戸時代以前に、神社を管理するために置かれた寺)である。

現在、備前国分尼寺は国分寺近くの赤磐市馬屋とされている。赤磐市馬屋への変化を確認したい。



- ① 江戸時代の地誌は、全て松林寺 備前国分尼寺説である。
- ② 昭和 37 年に『岡山県通史上編』に永山卯三郎氏が赤磐郡西高月村大村穂崎説を発表した。
- ③ 昭和 61 年に『岡山県史』の伊藤晃氏(岡山県古代吉備文化財センター)は、永山卯三郎説を継承した。
- ④ 平成 2 年の『岡山県史』の吉田晶氏(岡山大学教授。古代史)は、伊藤晃説を継承した。
- ⑤ 平成 19 年に『岡山県の会陽の習俗総合調査報告書』に竹林栄吉氏(ノートルダム清心女子大学)が、『備陽記』所収の「松林寺縁起」を紹介した。「岡山県教育庁文化財課に研究調査方向の間違いを指摘し、警笛を鳴らした」と理解したい。

1713 年(正徳 3 年) 池田家文書

『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』
史料コード 226000 TPA-01680

1721 年(享保 6 年)『備陽記』石丸平七郎定良
『黄蕨之前州高島山松林寺略縁』説を紹介
「当寺は原(もと)当国の国分尼寺にて聖武天皇天平 11 年(739 年)の御建立也」

1778 年(安永 7 年)『寸箴之地理』土肥経平
名所考・案内記「高島の松林寺にみづから
いふ、此寺昔の国分尼寺の跡なり」と説を紹介

1962 年(昭和 37 年)『岡山県通史上編』永山
卯三郎説「備前国分尼寺 赤磐郡西高
月村大村穂崎、字仁王堂に址あり今大半
用水池となる。」

1986 年(昭和 61 年)『岡山県史 第 18 巻考
古資料』伊藤晃説(考古学)「備前国分尼寺は、
国分僧寺の南 300mの所に位置している。」

1990 年(平成 2 年)『岡山県史 第三巻古代
Ⅱ』吉田晶説(古代史)「国分尼寺は、国分寺
の南 300mの位置にあるが未調査である。」

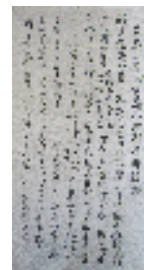
2007 年(平成 19 年)『岡山県の会陽の習俗総

合調査報告書』に、竹林栄吉氏が、『備陽記』
所収の「松林寺縁起」を紹介「編集の岡山県
教育庁文化財課に認知されたい。」

10 まとめ

吉備児島と高島に関する最も重要な調査は、
吉備の穴海の境界線確認である。現存する最古
の吉備の穴海絵図は、1644 年(正保 1 年)の備前
国絵図である。児島の屯倉の位置確認、永山卯
三郎説の「金甲山頂に郡神社の旧址存す。」は、
6 世紀末頃の須恵器が出土し駅館跡の姿が見え
てくるならば児島屯倉跡と推定できる。昭和 15 年
に確認されている長大の蕨が現在も自生してい
ることを、平成 27 年 6 月 24 日に、荒城祥智松林
寺住職と井上敏志氏(高島を考える会)に確認し
た。

『先代旧事本紀大成経』卷第七十二 国造本
記に、「黄蕨縣国造、黄蕨穴国造、黄蕨風国造」
と 3 国あり、児島は黄蕨穴国造である。「日代宮
御世、輪丹臣同祖彦熊命孫八千足尼、定賜国
造」は未解読である。



1644 年(正保 1 年) 備前国絵図(岡山県立図書館蔵)

参考文献

- 1 『古事記と日本書紀』2010 年 イーストプレス
- 2 『古事記祝詞』『日本古典文学大系 1』昭和 33 年岩波書店
- 3 『古代日本と児島半島史話』山崎多喜男 昭和 50 年
- 4 『古事記のコード(暗号)・太陽のラインと隠された古代地図』池田潤 戎光祥出版
- 5 『岡山県児島郡誌』私立児島郡教育会編 昭和 52 年 文献出版
- 6 『吉備児島略史』永山卯三郎 昭和 3 年 永玄石稿
- 7 『吉備津神社』藤井駿 昭和 48 年 日本文教出版

- 8 『岡山市史 古代編』昭和 37 年 岡山市役所
- 9 『吉備(黄蕨)国・高嶋宮伝承の解析』丸谷憲二 『きび考 第 4 号』平成 23 年 7 月
- 10 『遊高嶋記 他』1713 年(正徳 3 年)『池田家文書』
- 11 『吉備温故秘録 上巻』大沢惟貞 『吉備群書集成 第 7 号』昭和 45 年 歴史図書社
- 12 『式内社調査報告 第二十二巻』
- 13 『吉備の古代寺院』湊哲夫 亀田修一 2006 年 吉備人出版
- 14 『岡山県史 原始古代1第二巻』平成 3 年 岡山県
- 15 『東備郡村志』『吉備群書集成(二)』昭和 45 年 歴史図書社
- 16 『児島参修高島考写』水原岩太郎 昭和 15 年
- 17 「吉備高嶋宮考」春成秀爾『日本考古学史研究 第 2 号』2014 年 六一書房
- 18 『吉備国の語源「黄蕨」調査報告』丸谷憲二 平成 20 年 8 月 24 日
- 19 『2 月例会資料 記紀伝承の児島高島探訪』平成 27 年 2 月 11 日 先史古代研究会
- 20 池田家文書 『黄蕨之前州高島山松林寺略縁起』
- 21 『備陽記』石丸平七郎定良 昭和 40 年 日本文教出版
- 22 『寸箴之地理』土肥経平 安永 7 年 『吉備群書集成 第一巻』昭和 45 年 歴史図書社
- 23 『岡山の古文獻』中野美智子昭和 63 年 日本文教出版
- 24 『岡山県通史上編』永山卯三郎 昭和 37 年 岡山県通史刊行会 日本文教出版
- 25 『岡山県史 第三巻 古代Ⅱ』吉田晶平成 2 年岡山県
- 26 『岡山県史 第 18 巻 考古資料』昭和 61 年 岡山県史編纂委員会 岡山県
- 27 『先代旧事本紀大成経』
- 28 『山菜入門』1996 年 山と溪谷社
- 29 『日本の山菜 100』平成 22 年 栃の葉書房
- 30 『よくわかる山菜 大図鑑』2007 年 永岡書店
- 31 『野菜の日本史』青葉高 2000 八坂書房

次回例会のご案内

開催日 7月21日(火)13時30分～16時30分

会 場 ゆうあいセンター NPO 会館2階

参加費 資料代他 500 円

講演 第一部 講演 丸谷憲二

演題 吉備津神社七十五膳据神事
の〈七十五〉起源についての
考察

第二部 講演 井上秀男

演題 『きび考』寄稿論文の要点を説明します。

第三部 意見交換会

[illegible]

先史ウォークの案内

「西大寺一宮 安仁神社の遷拝所めぐり」
「備前一宮論争調査」第一弾

開催日 10月4日(日)9:30 集合 少雨決行
集合場所=ほんぶしん前のスーパープラッツ
の駐車場 弁当持参

車に乗り合わせて移動します。

参加費=1000 円(便乗代を含む)

案内と担当 当会会長 丸谷憲二

送迎が必要な方は 090-6837-1615 ま
で事前に連絡ください。配車の手配
します。

主な訪問先

安仁神社集合 ①.麻御山神社(おみやま)・②
松江伊津岐神社(まつえいつき) ・③幸地山神
社(こうちやま) ④ 綱掛石神社(つなかけい
し)・ ⑤伊登美宮(いとみ) 等

低い山ですが山道もあります。ウォークスタイルで御出ください。

編修後記

- “きび考”12号をお届けします。今回も多彩な内容になりました。力作が多く連載ものが重なりましたが如何でしょうか。
- 例会と先史ウオークを右の通り案内いたします。多くの皆様の参加をお待ちしています。
- 主な担当は例会とウオークは丸谷会長が、“きび考”の編集発行は山崎が担当します。ホームページは濱手英之さんが頑張ってくれています。情報をどしどしお寄せください。
- 今年度の会費は主に“きび考”発行の費用に充当します。例会参加の折に会計担当井上秀男まで納入ください。年会費＝2000 円です。
- 次回の”きび考”13号は新年あけて早々に発行予定です。皆様の寄稿をお待ちしています。今回事務局に頂いたお手紙から二例を取り上げました。参考にして下さい。

“きび考” 第12号

2015（平成 27）年 6 月 30 日発行

発 行 先史古代研究会 会長 丸谷憲二
事務局 702-8002 岡山県岡山市中区桑野 504-1
山崎泰二方

電話＝086-276-6654 FAX=086-276-2241

メ-ル＝senshi@bosaisystem.co.jp(事務局)

編集委員 山崎泰二（事務局長兼編集委員長）

井上秀男 延原勝志 樋口俊介

濱手英之 丸谷憲二（会長）